

第2章 大田区の 維持及び向上すべき歴史的風致

2-0. 歴史的風致の概要と分布状況

(1) 歴史的風致とは

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

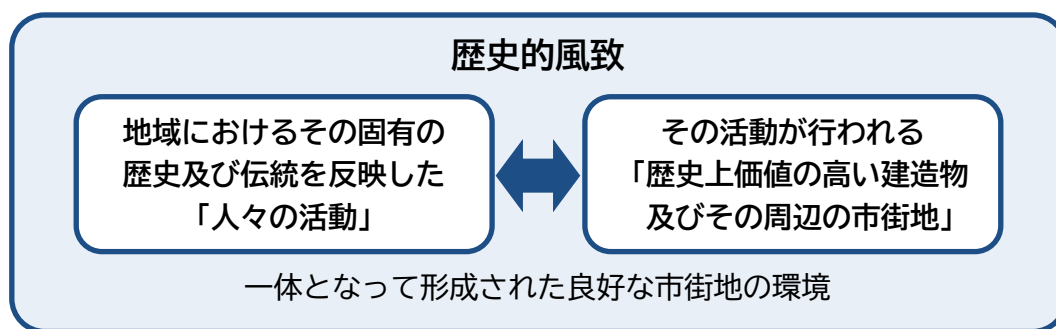


図 2-0-1 歴史的風致の構成

このため、大田区の歴史的風致の設定にあたっては、下記の3つの条件をすべて満たしているものとする。

- ①：地域の固有の歴史や伝統を反映した「人々の活動」が現在行われていること
- ②：①の活動が歴史上価値の高い建造物※とその周辺で行われていること
- ③：①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること

※「建造物」とは、建築物にとどまらず、遺構、庭園等、人工的なものを総称したものをいう。なお、3つの条件に該当する歴史的風致を形成する建造物等は築50年以上、活動は50年以上継続していることが必要となる。

(2)大田区の歴史的風致

大田区の維持・向上すべき歴史的風致は、以下のとおりである。

表 2-0-1 大田区の歴史的風致

項目番号※	歴史的風致の名称	掲載頁
2-1	01. 日蓮信仰にみる歴史的風致	P 2-1-1
2-2	02. 四季を彩る伝統文化にみる歴史的風致（8つの小風致で構成）	P 2-2-1
2-3	03. 天然鉱泉を用いた入浴文化にみる歴史的風致	P 2-3-1
2-4	04. 洗足池の景観保全にみる歴史的風致	P 2-4-1
2-5	05. 大森貝塚にみる歴史的風致	P 2-5-1
2-6	06. 海苔のふるさとにみる歴史的風致	P 2-6-1
2-7	07. 馬込文士村にみる歴史的風致	P 2-7-1

※後掲の見出し番号に符合

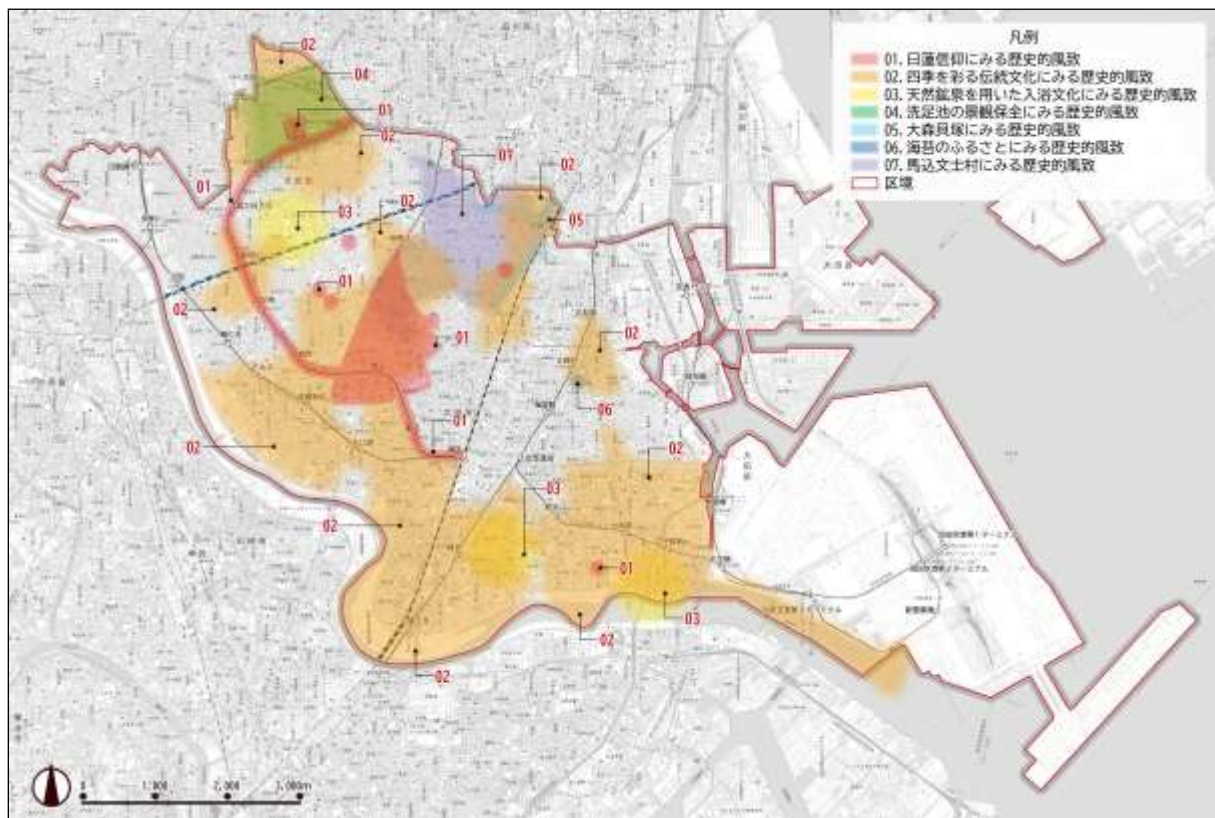


図 2-0-2 大田区の歴史的風致の位置

2-1. 日蓮信仰にみる歴史的風致

(1)はじめに

池上地域においては、鎌倉時代の高僧日蓮が入滅した霊蹟として知られる池上本門寺を中心に、日蓮への信仰を背景とした歴史的な街並みや伝統行事が継承されてきた。周辺地域は門前町として発展し、池上駅からの参詣道には今でも寺院や茶屋などが建ち並び、歴史を感じられる街並みが形成されている。

この地域では、毎年10月13日の日蓮の命日の2日前から「御会式」が開催され、万灯練供養や露店でにぎわう。御会式は古くから秋の風物詩として名高く、浮世絵や俳句からも様子を知ることができる。



図 2-1-1 木造日蓮聖人坐像

調整中

図 2-1-2 御会式(浮世絵)

(2)建造物

①池上本門寺大堂(祖師堂)

宝永7年(1710)に焼失したかつての祖師堂は、日蓮宗の信者であった加藤清正が慶長11年(1606)に建立したとされる。『大田区の文化財第八集(昭和47年(1972)、文化財専門委員)』によると、現在の大堂は昭和39年(1964)に再建されている。鉄筋コンクリート造、瓦葺、入母屋造。

大堂内には、日蓮の7回忌に造像された「木造日蓮聖人坐像(重要文化財)」が安置されているほか、天井画には川端龍子の絶筆となった「未完の龍」が描かれている。



図 2-1-3 池上本門寺(祖師堂)

②本門寺五重塔【重要文化財】

江戸幕府第2代将軍徳川秀忠の乳母岡部局の発願により秀忠が寄進し、慶長13年(1608)に完成した、現存する関東最古の五重塔で、重要文化財に指定されている。

初層のみを和様とし、2層以上を唐様とする折衷様式。高さは約29.5メートル。



図 2-1-4 本門寺五重塔

③池上本門寺宝塔【重要文化財】

日蓮が入滅した際の御荼毘所に建つ。文化・文政期(1804-1830)に編さんされた『新編武蔵風土記稿』等によると、池上宗仲が多宝塔を作り、日蓮の御余灰を中に盛って奉安したとされる。

現在の宝塔は文政11年(1828)に上棟し、天保元年(1830)に建立された。上下層ともに円形の平面を持つ木造の仏塔で、屋根は宝形造、銅板葺の上に露盤と相輪を載せている。屋外の木造宝塔として日本唯一の遺構であり、重要文化財に指定されている。



図 2-1-5 池上本門寺宝塔

【近在の万灯講中取持ち寺院】

池上本門寺周辺地域の 11 寺院では、各寺院を拠点とした「取持ち」と呼ばれる万灯講中が結成されている。これらの寺院及び講中は、池上本門寺における御会式の準備への協力や、各寺院が御会式を開催する際に他の寺院が万灯を引いて参拝するなど、寺院どうしに強いつながりが見られる。

表 2-1-1 近在の万灯講中取持ち寺院（出典：『大田区の文化財第八集(昭和 47 年(1972)、文化財専門委員)』

寺院	本堂建造(再建)年	寺院	本堂建造(再建)年
本行寺	享保元年(1716)	安詳寺	昭和 40 年(1965)
善慶寺	昭和 5 年(1930)	林昌寺	昭和 33 年(1958)
養源寺	昭和 40 年(1965)	長勝寺	江戸末期建造 [大正 3 年(1914)・昭和 46 年(1971)修復]
妙福寺	祖師堂(国の有形文化財) ※確認中※	微妙庵	※確認中※
本光寺	昭和 31 年(1956)改築	長照寺	昭和 34 年(1959)
妙雲寺	明治 5 年(1872) [昭和 44 年(1969)修復]		



図 2-1-6 妙福寺(祖師堂)



図 2-1-7 本光寺(本堂)

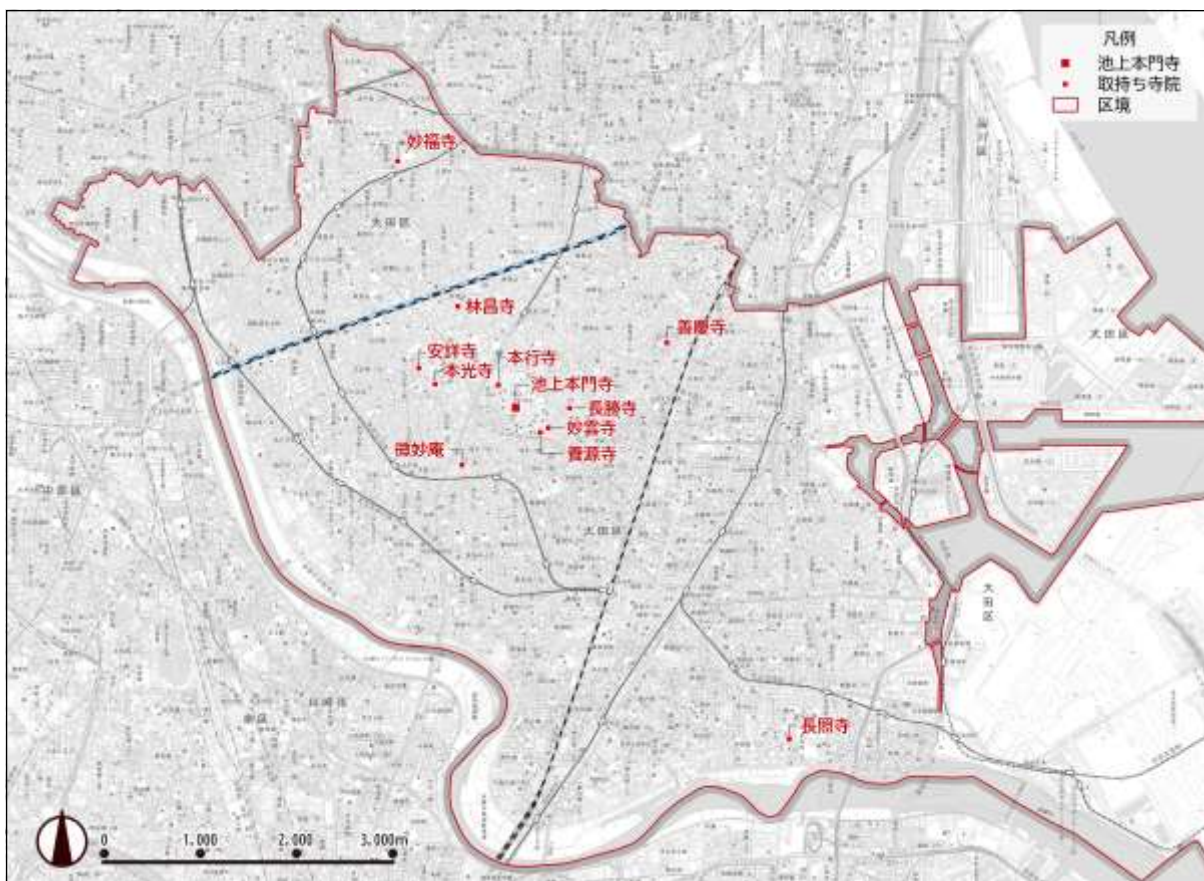


図 2-1-8 取持ち寺院の位置

④日蓮宗本山大坊本行寺

日蓮の入滅後、弘安6年(1283)に池上宗仲から日蓮の弟子に邸宅が寄進されたことにより本行寺が開創されたといわれる。

【本堂】

『大田区の文化財第八集(昭和47年(1972)、文化財専門委員)』によれば、現在の本堂は享保元年(1716)に完成した。木造、瓦葺、入母屋造。



図 2-1-9 本行寺本堂

【ご臨終の間】

日蓮が入滅した際に寄りかかっていたという池上宗仲邸宅の柱を安置するお堂。昭和11年(1936)に東京都の旧跡に指定された。木造、銅板葺、2層寄棟造、平屋。



図 2-1-10 ご臨終の間(お堂)

⑤善慶寺本堂

『大田区の文化財第八集(昭和47年(1972)、文化財専門委員)』によると、正応5年(1292)頃に創建、昭和5年(1930)に現在の本堂が完成した。木造、瓦葺、入母屋造。



図 2-1-11 善慶寺本堂

⑥養源寺本堂

『大田区の文化財第八集(昭和47年(1972)、文化財専門委員)』によると、慶安元年(1648)に開創されたが、文化元年(1804)に火災で全焼。

現在の本堂は昭和40年(1965)に完成した。木造、瓦葺、入母屋造。享保年間(1716-1736)に2度、8代将軍吉宗が鷹狩りを行う際の御膳所になったとされる。



図 2-1-12 養源寺本堂

(3)活動

①御会式

池上本門寺では、日蓮の命日である 10 月 13 日の 2 日前から、日蓮の報恩感謝のために営まれる法要行事として「御会式」が行われる。日蓮入滅の翌年から行われているといわれ、江戸時代は多数の参詣者でにぎわった。その様子は歌川広重と歌川豊国の合作「江戸自慢三十六興 池上本門寺会式(元治元年(1864))」に描かれているほか、松尾芭蕉が元禄 5 年(1692)に詠んだ俳句にも「御命講(=御会式)や 油のような 酒 五升」とあるなど、古くから知名度の高い行事であることがわかる。

さらに、『東急 100 年史(令和 5 年(2023))』によると、東急池上線の前身である池上電気鉄道が御会式に参詣する客の輸送を目的として大正 11 年(1933)に路線を敷設するなど、周辺地域のみならず全国から多くの人々が訪れる一大行事であった。

今でも御会式の期間が近づくと、区内にある東急池上線沿線の各駅舎にポスターが掲出されるほか、東急池上線・多摩川線蒲田駅のホームには万灯が飾られ、人々が足を止める様子が見られる。

御会式は10月11日から13日の3日間営まれ、供養式や宗祖御更衣法要をはじめとする6回の法要が行われる。期間中は池上駅前から新参道経由で門前に至る道および池上文化センターに至る道には左右びっしりとバリエーション豊かな露店が軒を連ね、浴衣姿で飲食を楽しむ人々や、祭りの様子を珍

調整中

図 2-1-13 歌川広重と歌川豊国の合作
「江戸自慢三十六興 池上本門寺会式」
(東京都立図書館←未確認)



図 2-1-14 御会式に集まる人々(昭和 6 年(1931))

しように写真に収める外国人観光客など、人々がひしめき合う光景が見られ、地域のにぎわいを感じることができる。

御会式の期間で最も盛り上がりを見せる 10 月 12 日のお逮夜では、東急池上線は運転本数を増発した臨時ダイヤで運行される。最寄り駅である池上駅に到着した車両からは参詣客が続々と降車し混雑する様子が見られ、この日に限って駅の 1 階に臨時改札が設置されるなど、地域全体に活気が広がっている。東急池上線の増便は古くから継続して行われており、昭和 7 年(1932)に刊行された『池上町史』にも池上線が終夜運転している記載があるなど、当時から御会式が一大イベントであったことがわかる。現在も約 30 万人もの参詣客が訪れる。

また、12 日は大堂において宗祖報恩御逮夜法要が営まれ、多くの参拝参詣客が祈りをささげる姿が見られるほか、宝塔が 12 日及び 13 日の午前中に開扉されるため、内部に安置された小型の宝塔を一目見ようとする参詣客で混雑する様子が見られ、日蓮への畏敬と信仰の篤さが見て取れる。

9 月から 11 月にかけては取持ちの寺院でも御会式が行われ、池上本門寺ほどの規模ではないものの、万灯が掲げられ、多くの露店が出るなど、人々の往来と団扇太鼓の音色で地域全体の活気を感じることができる。



図 2-1-15 蒲田駅の万灯(令和 7 年(2025))



図 2-1-16 御会式時の池上駅の様子
(昭和 26 年(1951))



図 2-1-17 『池上町史』(昭和 7 年(1932))



図 2-1-18 御会式ポスター[石川台駅]
(令和 7 年(2025))



図 2-1-19 御会式の様子(現在)

【万灯練供養】

日蓮の命日の前日であり、「お逮夜」と呼ばれる10月12日には万灯練供養が行われる。新参道から総門をくぐり、此経難持坂と呼ばれる96段の石段を上り、境内に至るまでの約2キロメートルを、100を超える講中、総勢約3,000人が団扇太鼓で題目を唱え、纏を振り、和紙で作られた桜の花で飾った万灯をかがげ、鉦や笛の音色とともに練り歩く。纏振りなどを披露した後、大堂と経蔵の間を進み、本殿へと行列が続く。和紙で作られた桜の花は、日蓮が入滅したときに大地が震動し、季節外れの花が咲いたという伝承に由来する。古くは提灯にろうそくを灯した「提灯万灯」を、団扇太鼓をたたきながら参詣する簡素なものだったが、明治時代に火消たちが参詣に訪れたことなどを契機として、纏を振るようになったという。池上本門寺と強いつながりを持つ池上・久が原等の周辺地域には、かつて日蓮宗檀徒の密集地が分布し、地域の日蓮宗寺院を中心に「取持ち」と呼ばれる万灯講中が結成された。各寺院で日にちをずらして御会式を開催し、相互で万灯を行き来させるなど、池上本門寺だけでなく、周辺の地域が一体となって伝統行事に活気をもたらしめている。万灯は講中によって異なり、五重塔を模したものや提灯が複数つけられたものなど様々な種類がある。全国各地から集まった万灯が、周辺を練り歩き、にぎやかに参拝する様子は、数百年にわたり受け継がれてきた信仰と地域のつながりを感じることができる。



図 2-1-20 万灯練供養の様子
(昭和7年(1932)頃)



図 2-1-21 万灯練供養の様子(現在)

(4)まとめ

700 年以上続く御会式は、日蓮宗の開祖日蓮の霊跡である池上本門寺を中心に盛り上がりを見せ、各法要が厳かに行われる一方で、万灯練供養は夜遅くまで太鼓や鉦の音、題目を唱える声が響き、全国からの参詣者でまち全体が熱気に包まれる。地域住民によって長きにわたり継承されてきた伝統行事と、池上本門寺をはじめとした建造物や周辺市街地が一体となり、歴史的風致を形成している。

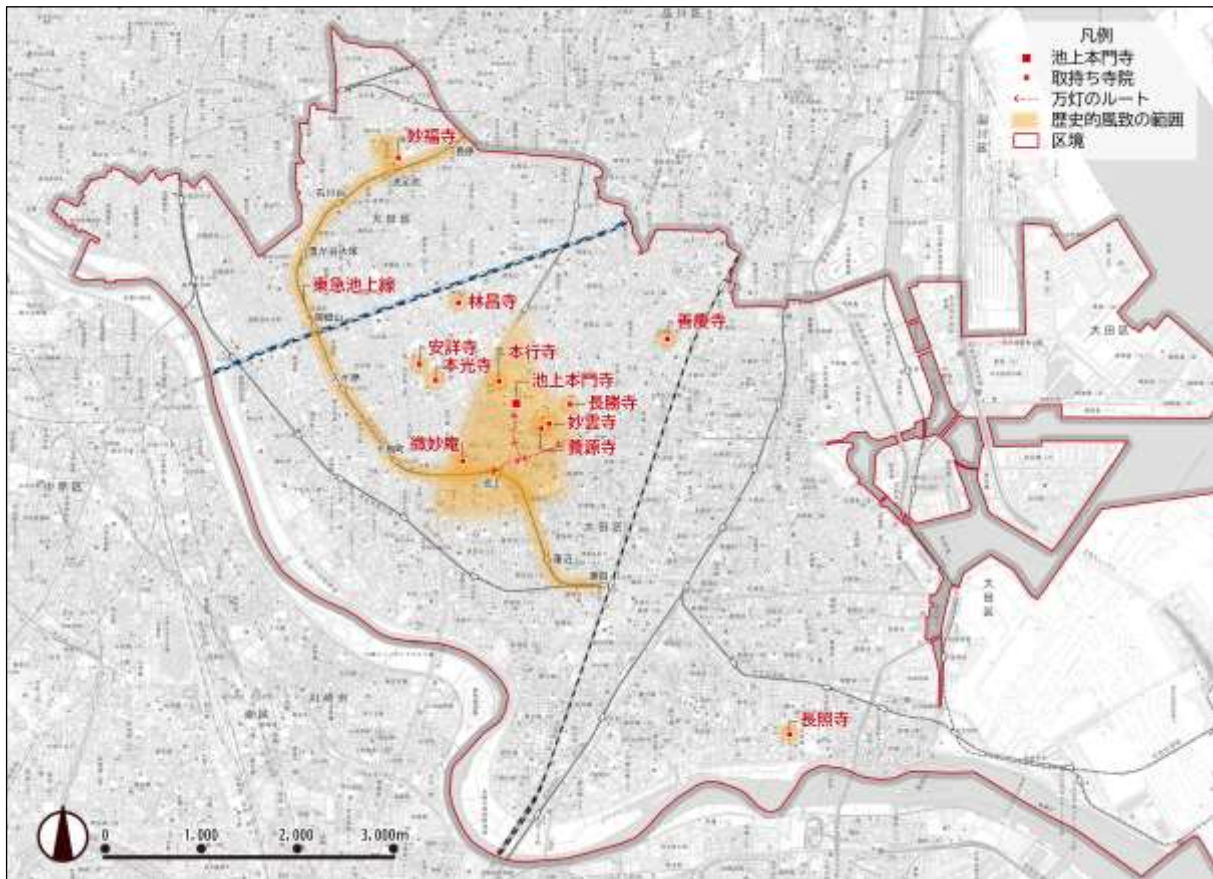


図 2-1-22 日蓮信仰にみる歴史的風致の範囲

2-2. 四季を彩る伝統文化にみる歴史的風致

(1)はじめに

大田区は、東京 23 区最大の面積を誇り、豊かな自然と深い歴史を併せ持つ、多彩で魅力的な地域である。多摩川の清らかな流れ、洗足池の静けさ、そして池上本門寺の荘厳さなど、都会の喧騒から一步離れた場所で、四季折々の美しい景観を楽しむことができる。

この恵まれた環境の中で、長い歴史を通じて育まれてきた独自の文化や風習が、今なお生き生きと息づいている。これらは、春夏秋冬それぞれの季節に根ざしたものであり、古くから地域の人々に親しまれ、数百年の歴史を持つものも含め、世代を超えて大切に受け継がれている。神社仏閣での祭礼、地域に伝わる活動、こども向けイベントなど、その形態は多岐にわたるが、いずれも当区の歴史と文化を象徴する重要な行事である。

以下では、これら数多くある伝統行事や祭礼の中から、特に代表的なものを 8 つ紹介する。

表 2-2-1 四季を彩る小風致

季節	小風致※ ¹	建造物等	活動
春 (3～5月)	(2)禰宜 ^{ねぎ} の舞にみる歴史的風致	天祖神社(西嶺町)	禰宜の舞
	(3)子どもガーデンパーティーにみる歴史的風致	本門寺公園※ ² 洗足池公園※ ² 萩中公園※ ² 多摩川緑地区民広場※ ²	子どもガーデンパーティー
	(4)水神祭にみる歴史的風致	水神社	水神祭
夏 (6～8月)	(5)子ども神獅子舞にみる歴史的風致	六郷神社	子ども神獅子舞
	(6)水止舞にみる歴史的風致	厳正寺	水止舞
秋 (9～11月)	(7)双盤念仏にみる歴史的風致	今泉延命寺	双盤念仏
冬 (12～2月)	(8)義民六人衆報恩感謝祭にみる歴史的風致	善慶寺	義民六人衆報恩感謝祭
	(9)子ども流鏑馬にみる歴史的風致	六郷神社	子ども流鏑馬

※1：「小風致」の番号(2)～(9)は、後掲の見出し番号に符合する。

※2：年度によっては、会場とならない場合がある。

¹ 神社に奉仕する神職の役職の 1 つ。一般的に宮司を補佐する立場の者。

(2) 禰宜の舞にみる歴史的風致

①はじめに

天祖神社(西嶺町)は寛文年間(1661-1672)に創建されたと伝わり、毎年4月21日の例祭に奉納される「禰宜の舞」は江戸時代中期から続くといわれる伝統行事である。太鼓の響きから「デデンコ舞」とも呼ばれるこの伝統行事は、かつて多摩川沿岸地域の各所で行われていたが、現在、都内では唯一この神社のみに継承されている。

②建造物

ア. 天祖神社(西嶺町)社殿

『新編武蔵風土記稿』(文化7年(1810)~文政9年(1829))の記録によれば、寛文年間(1661-1672)に嶺村の住人が伊勢神社への参拝時に授与された御神霊を祀って創建したとされている。この史料は当神社が350年以上の歴史を持つことを裏付けている。

『大田区の文化財第二十三集(昭和62年(1987))』によると、明治20年(1887)に竣工した前社殿は一間社流造、銅板葺の様式であった。

昭和初期には、東調布第一小学校の木造校舎建て替えて生じた古材を活用し、境内に嶺町公会堂が建設された。

昭和47年(1972)には都道環状8号線建設に伴い、境内面積が半分以下に縮小するという大きな変化があった。同年に本殿・鳥居・社務所が新たに建立され、参道・玉垣を含む境内整備が完了した。天祖神社建立の記念碑には、社殿が昭和47年(1972)に建立されたことを記した刻印がある。

現在の社殿は一間社流造から神明造に変更され、葺材には銅板が使用されている。



図 2-2-1 天祖神社(西嶺町)社殿



図 2-2-2 天祖神社建立の記念碑
(昭和47年(1972)の刻印)

③活動

ア. 禰宜の舞

禰宜の舞は、毎年4月21日に天祖神社で奉納される民俗芸能であり、厄払いと豊作を祈願する神楽として位置付けられる。江戸時代中期頃を起源とし、かつては多摩川を中心に調布市から大田区六郷近辺まで、川の両側の神社や町の広場など約20か所に、川崎市にある白幡八幡大神の神職が出向いて行っていたが、戦後は都内では天祖神社(西嶺町)のみに継承されている。

この舞は境内に莫蔭を敷き、注連縄を張り、神膳矢・餅・笹を供える厳格な様式のもと、1人がさる た ひこのみこと猿田彦命、あめのうずめ のみこと天鈿女神等を表す5種の面と色鮮やかな衣装を舞ごとに使い分け、太鼓の音に合わせて6つの演目を舞う形式が特徴となっている。「デデンコ舞」と呼ばれる締め太鼓による奏楽は、舞の後に執り行われる湯立ての儀式「お湯花」と共に、一連の伝統行事として継

承されている。これらの一連の神聖な所作と音色、光景に、古来より伝わる神事の厳かさと神秘性が漂い、江戸時代から受け継がれてきた地域の信仰と文化の深さを感じられる。毎年、この舞には、旧嶺村(現北嶺町、東嶺町、西嶺町)の崇敬者が訪れ、一部始終を見守り、祈りを共に捧げている。樹齢数百年の御神木に囲まれた天祖神社の境内と、石畳の参道、そこで執り行われる禰宜の舞からは、舞うごとに変わる面と装束の彩りと太鼓と鈴が静寂の中で厳かに響き渡る音を感じられる。



図 2-2-3 禰宜の舞(昭和46年(1971))



図 2-2-4 禰宜の舞(現在)

④まとめ

天祖神社(西嶺町)の禰宜の舞は、都内における唯一の継承例とし、例祭当日には地域内外から参観者が訪れており、地域の活性化や文化交流の促進に寄与している。

こうした伝統行事の継承活動を通じて、歴史的な祭事と現代の都市生活が共存する文化的景観が形成されており、この地区特有の歴史的風致が感じられる。

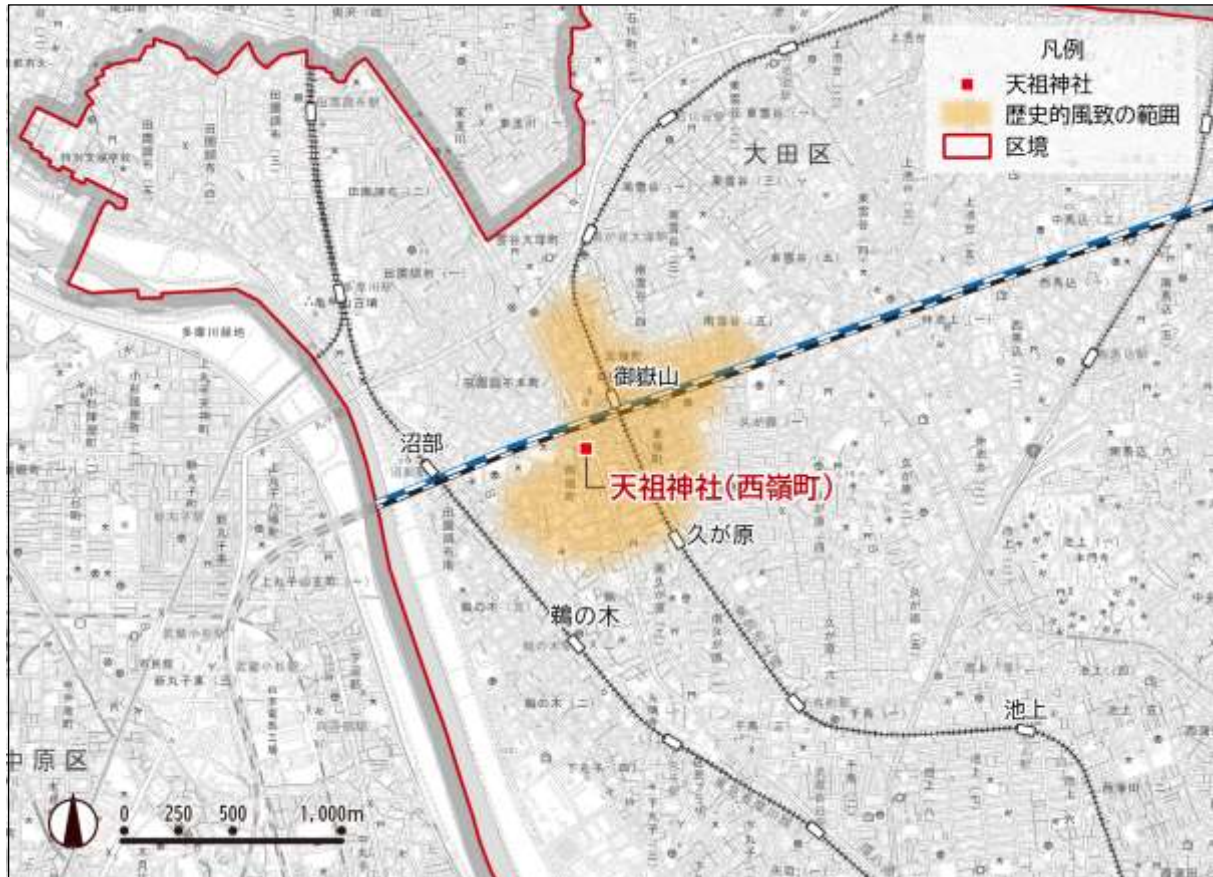


図 2-2-5 禰宜の舞にみる歴史的風致

(3)子どもガーデンパーティーにみる歴史的風致

①はじめに

子どもガーデンパーティーは昭和25年(1950)から続く区内有数の地域行事であり、こどもを中心とした世代間交流の促進や地域コミュニティの醸成等を目的としている長い歴史と大田区の「地域力」を結集した伝統行事である。

地域の公園や緑地等を会場に区民や関係団体が協力して企画・運営する体験型イベントであり、世代を超えた交流の場として長年親しまれている。令和7年度(2025)実施時点で74回目を迎えた。

②建造物等

ア.本門寺公園

本門寺公園は、700年以上の歴史を持つ日蓮宗の大本山・池上本門寺の東側に位置する公園で、昭和13年(1938)に東京市立公園として開園した。その後、昭和26年(1951)に東京市より管理委任され、昭和50年(1975)に東京都より移管されて区立公園となった。総面積28,366平方メートルを有する当公園は、池上本門寺の丘陵地に沿って造られており、起伏に富んだ地形を活かした公園である。

園内には古くから受け継がれてきた斜面樹林の中を散策できる園路が造られ、池上本門寺境内と繋がっている。公園には、長年地域に親しまれてきたキャンプ場や桜が咲き誇る広場、古くから地域の憩いの場であった運動広場や子ども広場が配置されている。また、園内にある弁天池は、江戸時代から伝わる貴重なフナ釣りの文化を今に伝える場として親しまれている。



図2-2-6 本門寺公園(昭和22年(1947))



図2-2-7 本門寺公園(昭和59年(1984))

イ. 洗足池公園【東京都指定の名勝】

洗足池公園の総面積は約 77,000 平方メートルであり、そのうち公園内に所在する洗足池の面積は約 41,000 平方メートルである。洗足池の平均水深は約 1.5 メートルであり、園内の中央部を南北に細長く占める形で位置している。したがって、洗足池は公園全体の面積の約 53% を占めていることになる。

洗足池は武蔵野台地の南端にあたる荏原台の谷地部をせき止めることで形成された淡水池であり、かつては灌漑用水として利用されていた経緯をもつ。池の周囲には崖線地形の名残をとどめた樹林地があり、公園の景観に変化を与えている。

洗足池駅周辺の標高は約 21 メートルと大田区内では比較的高い位置にあり、公園全体は緩やかな起伏に富んだ地形を特徴としている。

平成31年(2019)3月、洗足池公園は大田区内初となる東京都指定の名勝となった。



図 2-2-8 洗足池公園

ウ. 萩中公園

萩中公園は、昭和 38 年(1963)に都立公園として開園し、昭和 40 年(1965)に東京都から大田区へ移管された区立公園である。園内には、プール、野球場及び交通公園等があり、多くの利用者が訪れる人気の公園である。また、64,114 平方メートルの規模を有している区内でも代表的な大規模公園の 1 つである。

公園の特徴である「交通公園」は、実際の道路を模した信号機付きのコースでこどもたちが正しい交通マナーや安全意識を育む重要な役割を担い、幅広い世代にわたって利用される光景から、地域に根ざした安全文化を継承する場となっている。また、通称「ガラクタ公園」と呼ばれ、かつて活躍した蒸気機関車、都電、消防車及びトラック等の乗り物が展示されており、時代を超えて乗り物文化に触れることができる貴重な空間となっている。



図 2-2-9 萩中公園(昭和 42 年(1967))



図 2-2-10 萩中公園(平成 7 年(1995))
※三色のモニュメントは、昭和 42 年(1967)から存在する(◀印)

工. 多摩川緑地区民広場

多摩川緑地区民広場は、昭和 39 年(1964)に開催された「第 18 回オリンピック競技大会(東京オリンピック)」を契機に健康増進などを目的として昭和 39 年(1964)に開設した多摩川の流に寄り添うように位置する広場である。1 周 400 メートルのトラックを有し、地域の運動会や競技会などで活用されている。また、夏季に開催される大田区平和都市宣言記念事業「平和のつどい(平和記念花火)」における観覧スポットとして

でも親しまれており、多摩川の水面に映る花火の光景は、四季を大切にする日本の風情と、地域の絆を育む文化的営みを映し出す、美しい景観を作り出している。



図 2-2-11 多摩川緑地区民広場

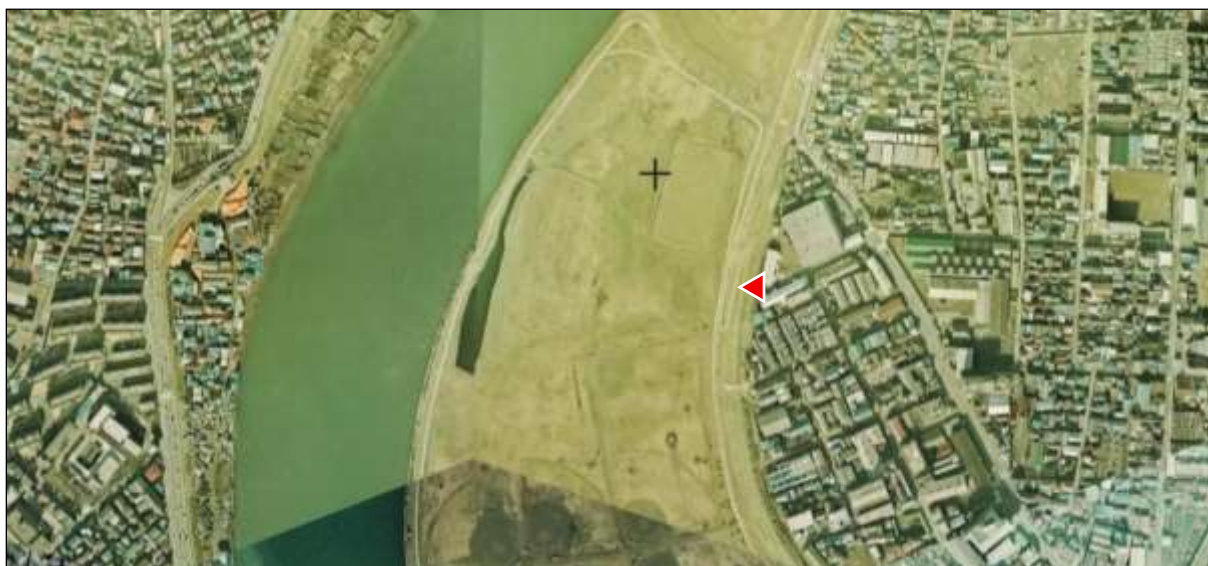


図 2-2-12 多摩川緑地区民広場の航空写真(昭和 49 年(1974)～昭和 53 年(1978)撮影)



図 2-2-13 多摩川緑地区民広場の航空写真(令和元年(2019)撮影)
※堤防(提外地側)の法面にある坂路が昭和 49 年(1974)当時から存在する(◀印)

③活動

『大田区政 50 年史(平成 9 年(1997) 3 月)』によると、子どもガーデンパーティーは、戦後の混乱期である昭和 25 年(1950)に始まった地域行事である。休日を親子で過ごす機会に恵まれない子どもたちに遊びの場を提供しようという思いから、地域の人々のボランティアによって開始された。青少年の健全育成を地域全体で支えるという大田区の理念を具現化した原点的なイベントとして、昭和 25 年(1950)から始まり、令和 7 年度(2025)で 74 年目を迎え、区民に親しまれてきた。右に掲載した図をはじめとする写真からは、このイベントが始まった当初から多くの区民等が参加し、賑わいを見せている様子が読み取れる。

このイベントは例年 4 月下旬に開催されており、令和 7 年度(2025)(第 74 回)は蒲田東会場が新たに加わり、区内 11 会場での実施となった。区内の歴史的・文化的価値を有する公園や緑地等を活用し、世代を超えた区民の交流の場として根付いている。

各会場ではアスレチックやミニ動物園、模擬店など、それぞれに趣向を凝らした催し物が用意されている。子どもたちがゲームや軽スポーツを通じて楽しむだけでなく、地域の連携を深める機会ともなっている。会場では、子どもたちの笑い声が響き渡り、地域の人々が集い、交流する活気ある風景が創出されている。



図 2-2-14 第 2 回ガーデンパーティー
(本門寺公園)(昭和 29 年(1954))



図 2-2-15 第 68 回ガーデンパーティー
(本門寺公園)(平成 31 年(2019))



図 2-2-16 第 74 回ガーデンパーティー
(洗足池公園)(令和 7 年(2025))

表 2-2-2 子どもガーデンパーティーの会場(平成 31 年度(2019)～令和 7 年度(2025))

会場	第 68 回 平成 31 年度(2019)	第 73 回 令和 6 年度(2024)	第 74 回 令和 7 年度(2025)
平和島会場	平和島公園	平和島公園	平和島公園
馬込会場	馬込第二小学校	梅田小学校	馬込第二小学校
池上会場	本門寺公園	池上会館	池上会館
新井宿会場	大田文化の森 入新井第二小学校	大田文化の森	大田文化の森
多摩川台会場(H31, R6) せせらぎ会場(R7)	多摩川台公園	多摩川台公園	田園調布せせらぎ公園
洗足池会場	洗足池公園	洗足池公園	洗足池公園
萩中会場	萩中公園、萩中小学校	萩中公園 萩中小学校/出雲中学校	萩中公園野球場 萩中小学校/出雲中学校
六郷会場	多摩川緑地区民広場	多摩川緑地区民広場	多摩川緑地区民広場
矢口会場	多摩川大橋緑地	多摩川大橋緑地	多摩川大橋緑地
蒲田西会場	矢口小学校	矢口小学校	ふれあいはずぬま
蒲田東会場	—	—	蒲田小学校

※令和 2 年度(第 69 回)～令和 4 年度(第 71 回)は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から開催を中止。

令和 5 年度(第 72 回)は、雨天のため、開催中止。

子どもガーデンパーティーの特徴は、こどもたちが主役であると同時に、イベントを支える地域の人々にとっても重要な意義を持つ点にある。運営に関わる大人たちにとっては地域コミュニティを築く絶好の機会となり、世代を超えた交流の場として機能している。現在では約 5 万人が参加する区の一大会事へと成長し、地域住民の間に深く根付いた文化として大切に継承されている。

この大規模なイベントを支えるのは、大田区青少年対策地区委員会会長会及び各会場実行委員会(11 団体)を主催とし、大田区と大田区教育委員会の共催の体制である。さらに、大田区自治会連合会、大田区立小学校 PTA 連絡協議会、大田区立中学校 PTA 連合協議会、大田区青少年委員会、大田区スポーツ推進委員協議会、大田区少年少女団体協議会、大田区レクリエーション連盟、(公財)大田区スポーツ協会など多様な地域団体(令和 7 年度(2025): 26 団体)が連携して運営に携わっている。この地域ぐるみの協働体制は、区の伝統行事を支える重要な基盤となっている。

このように、子どもガーデンパーティーでは区内各所の公園や公共施設が有効活用される様子が見られ、地域住民の交流促進とこどもたちの安全な遊び場の創出により、活気ある居住環境と調和のとれた市街地の良好な環境が形成されていることが感じられる。日が暮れ始める頃には疲れながらも満足感に満ちた表情で家路に向かう家族連れの姿から、この行事が区民の心に刻まれ、明日への活力を生み出している様子が見られる。

④まとめ

子どもガーデンパーティーは、区の地域文化を象徴する行事として、時代の変化に対応しながらも本質的な価値を継承してきた。事業開始当初から50年以上にわたり、会場として活用されてきた本門寺公園の歴史的景観や洗足池公園の水辺環境など、区内の特色ある公園や緑地を活用することで、都市部における自然との触れ合いや環境教育の場としても機能している。

このイベントを通じて、こどもたちは地域の自然や歴史への愛着を育み、地域住民は公園や緑地に親しみながら交流を深めている。こうした交流は、災害時の共助の基盤となるネットワーク形成にも寄与している。

また、運営に携わる様々な世代の区民にとって、このイベントは地域貢献の実践の場であり、世代間の知識や経験の伝承機会となっている。子どもガーデンパーティーは、長年にわたり受け継がれてきた地域の人々の営みと、それを取り巻く歴史的な公園や緑地等の環境が一体となって醸し出す歴史的風致となっている。

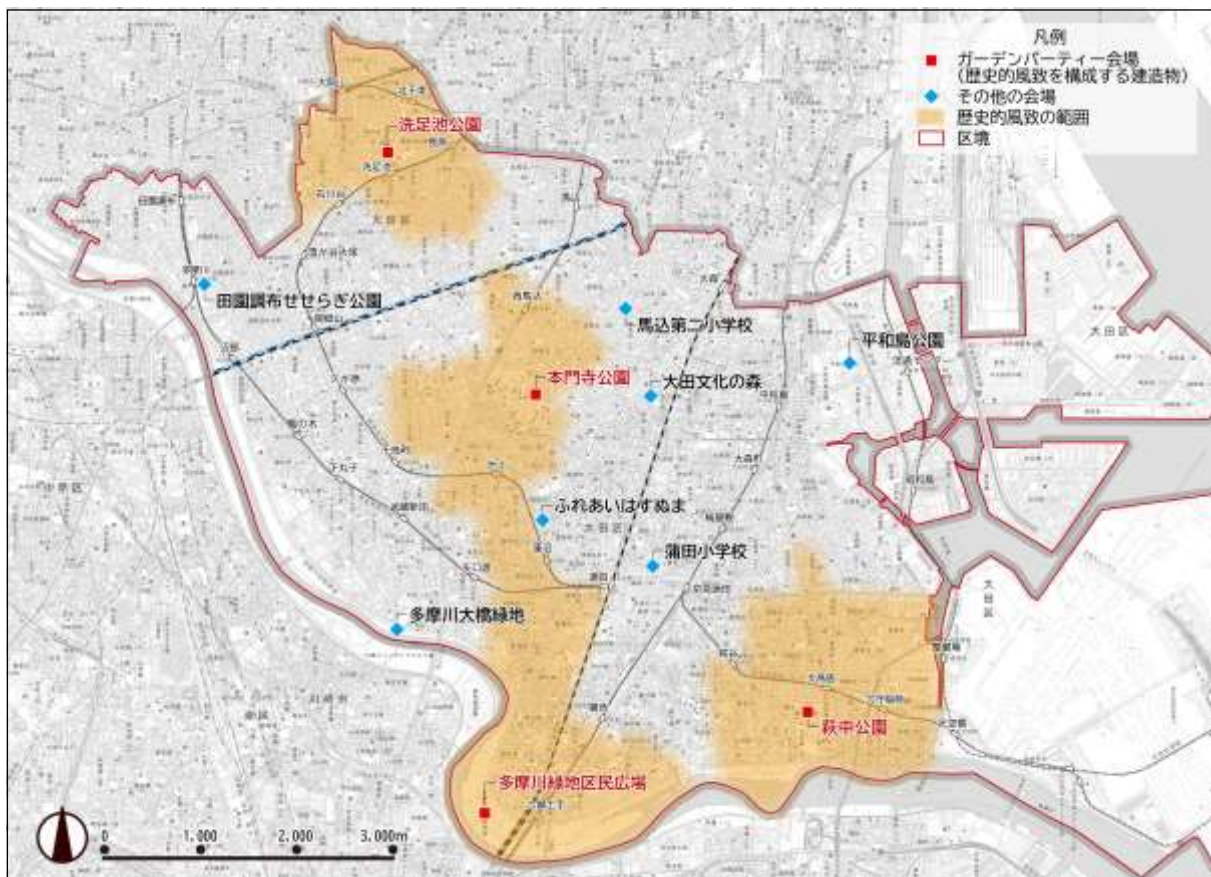


図 2-2-17 子どもガーデンパーティーにみる歴史的風致

(4)水神祭にみる歴史的風致

①はじめに

羽田地区は古くから漁業が盛んな町として発展してきた。東京湾に面したこの地域では、海の恵みを得るために漁民たちが水神を信仰し、その信仰の中心となったのが水神社である。江戸時代から続く水神信仰は、羽田の人々の生活と密接に結びつき、地域アイデンティティの重要な部分を形成してきた。この地域の精神文化を象徴する水神祭は、長年にわたり羽田の海の安全と豊穡を願う人々の祈りの場として機能し、地域社会を結びつける重要な行事となっている。

②建造物

ア.水神社社殿

海上安全、大漁満足を祈願した漁民に信仰された神社であり、『大田区の文化財第7集(昭和46年(1971)3月)』によると、現存する社殿は昭和28年(1953)に竣工された木造建築である。

伝統的な日本建築様式を採用し、切妻造の屋根が特徴的である。屋根の葺材に使用されている銅板が緑青色に変化している様子から、相応の時間の経過がうかがえる。



図 2-2-18 水神社社殿

③活動

ア.水神祭

羽田には、曳舟祭と水神祭という2つの船による大きな祭礼が存在した。曳舟の行事は昭和12年(1937)に廃絶したが、水神祭は昭和20年(1945)までは毎年盛大に行われていた。この水神祭は漁民を中心に執り行われ、毎年1・5・9月の11日に海上安全と大漁を祈願する行事として、玉川弁財天を中心に羽田弁天講が受け継いできた伝統行事である。



図 2-2-19 水神祭(昭和47年(1972))

水神祭は特に1月の神事が最も盛大であった。かつての水神祭では、羽田の各町から24~25歳の若者たちが神社の境内に集まり、神官の祈祷を受けた後、地元の人々が唄う羽田船謡が奏でられるなか、海に飛び込む神事が行われた。この神聖な瞬間には、旗や吹き流しで美しく飾られた漁船が波間を進む姿が見られた。羽田の海と共に生きてきた人々の深い信仰と祈りが感じられたこの儀式において、羽田の各町からは

船が沖に繰り出し、船から海中に投げ込まれた角樽を若者たちが奪い合った。若者は3～5年の年限を定めて願いをかけ、この樽を取ることで願いが叶うとされた。

水神祭の特徴の1つである船謡は、この祭りだけに伝わる大変ゆったりとした重みのある歌で、師について習わなければならないほど難しいものであった。羽田の地区によって唄い方が少しずつ異なるという地域的特色も持っていた。各船は漁場を回りながら御神酒を海に注ぎ、この船謡を唄いながら帰港した。



図 2-2-20 水神祭(昭和 47 年(1972))

羽田空港の拡張や水質の変化により漁業が衰退し、漁業をする人々の減少に伴い、水神祭に参加する人々も少なくなった。特に船謡を唄える人がいなくなったことで、水神祭は形を変えて継承されることになった。

平成初期以降の水神祭は、主に5月11日を祭日(例大祭)と定め、まず「大漁満足・船中安全・海上安全」を水神社の社前にて神職が祝詞を上げ祈願し、続いて神職・参列者全員が船に乗り込み多摩川河口にある通称「お神酒上げ棒」前にて再び祝詞を上げ、その祈願札をお神酒上げ棒に括り付けて1年間の海の安全を祈っている。大田漁業協同組合による境内でのアサリやアナゴの振る舞い天ぷらは、コロナウィルス感染症蔓延以降、残念ながら人手不足もあって中止となっているが、境内の舞台では里神楽が奉納され、巳年には玉川弁財天の本尊である弁財天像の御開帳があり、この年にはおすがたの札が配布される様子が見られる。



図 2-2-21 水神祭(平成 29 年(2017))

このように水神祭は形を変えながらも、地域の人々の取り組みにより羽田地域の伝統行事として、そして東京湾沿岸では残り少ない船上での神事として、今日まで大切に継承されており、水辺の公共空間と地域文化が調和した季節の風物詩が見られる場となっている。この祭礼を通じて、地域の歴史文化を活かした都市の個性が育まれ、住民の交流を促す良好な市街地環境が感じられる。

④まとめ

羽田地区における水神信仰は、地域社会の結束を支える文化的要素として今日まで息づいている。都市化の進展と漁業の衰退という変化のなかでも、水神祭は形を変えながら地域の人々によって大切に受け継がれてきた。

水神社を中心とした信仰と祭礼は、現代においても羽田の人々の精神生活の一部として、東京湾と共に歩んできた地域の歴史を物語っている。こうした文化的実践は、都

市開発が進むなかでも地域固有の伝統を保ち続けている。

水神社とその祭礼は、羽田の歴史と現代をつなぐ文化的活動として、都市空間における伝統文化の継承を象徴する歴史的風致となっている。

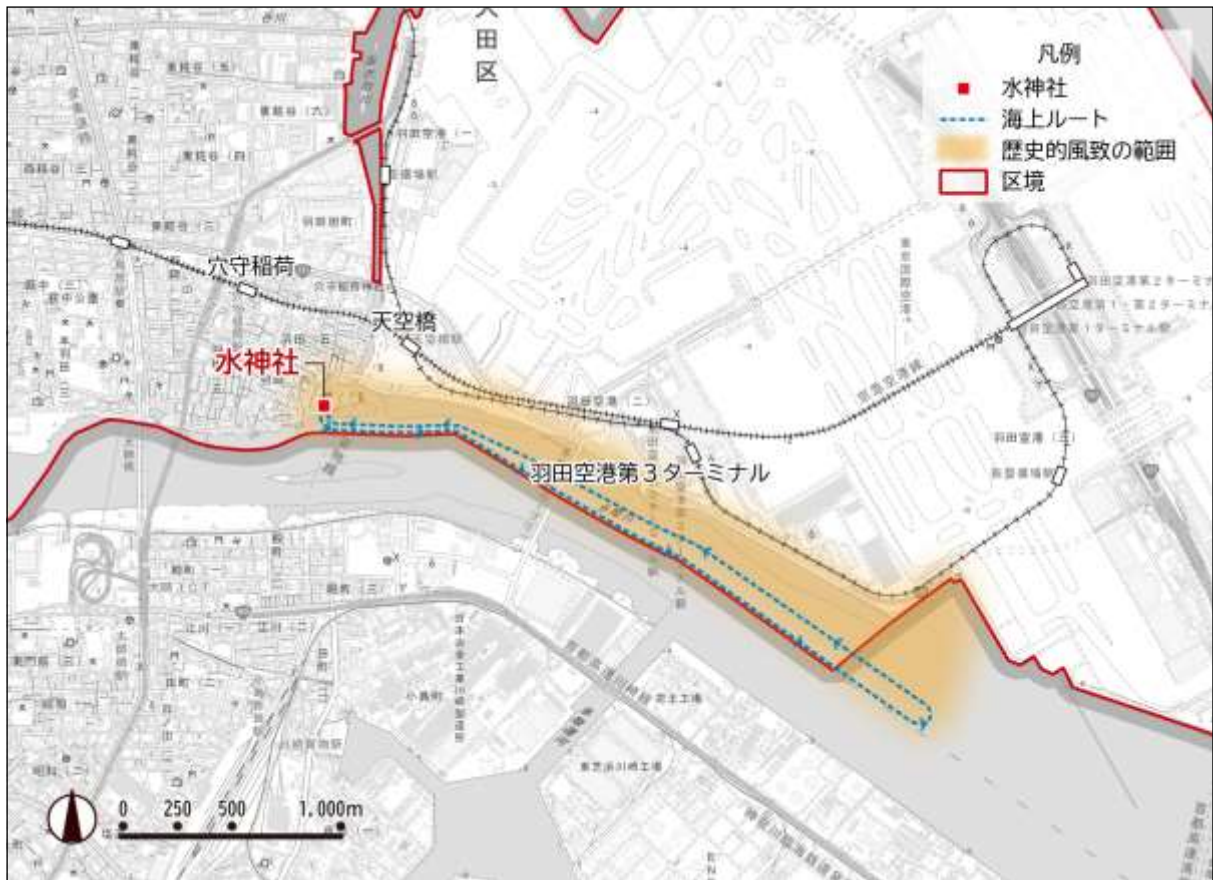


図 2-2-22 水神祭にみる歴史的風致

(5)子ども神獅子舞にみる歴史的風致

①はじめに

六郷地区は多摩川の下流域に位置し、古くから水運の要所として発展してきた地域である。この地に鎮座する六郷神社は1,000年近い歴史を持ち、地域住民の精神的な拠り所として機能してきた。六郷の人々はこの神社を中心に独自の文化と伝統を育んできており、なかでも子ども神獅子舞は地域のアイデンティティを象徴する文化遺産として今日まで大切に継承されている。

②建造物

ア.六郷神社

天喜5年(1057)に源頼義と源義家が奥羽地方の平定に向かう途中、この地を訪れ、ここにあった古い杉の木に白旗を掛け、石清水八幡に武運長久を祈願したところ、士気が大いにふるい、前九年の役に勝利を収めたため、その分霊を勧請したのが創建とされている。

社殿は本殿、幣殿、拝殿の3つで構成される権現造である。権現造は東照大権現(徳川家康)を祀る東照宮に代表される建築様式であり、当社がかつて家康から朱印地を寄進され、社紋に徳川葵を用いていることから、家康への崇敬を込めて建立されたものと考えられる。

本殿は三間社流造で、棟札によると、享保4年(1719)の建立と推定される。また、幣殿は切妻造で、昭和42年(1967)頃の建立とされるが、昭和62年(1987)に改築されている。拝殿は切妻造向拝付で、大正10年(1921)頃の建立とされるが、幣殿と同じく昭和62年(1987)に改築されている。いずれも木造で、屋根は銅板葺である。

拝殿の前には、江戸時代/貞享2年(1685)に作られた区内最古であり、区指定有形文化財の一对の狛犬が鎮座している。造形的にも他に類を見ない独創的なものであり、願意が二世安楽と中世的なところも注目に値する。



図 2-2-23 六郷神社の狛犬(貞享2年(1685))

③活動

ア.子ども神獅子舞【区指定の無形民俗文化財】

毎年6月上旬の土・日曜日、六郷神社の大祭において、小学生のこどもたちが神獅子を舞う様子が見られる。この神獅子舞は2匹の雄獅子と1匹の雌獅子による「雌獅

子隠し」という形式で、関東地方に広く分布している3匹獅子舞の一種である。小学2年生から6年生の少年たちが獅子役を担当し、獅子頭を掲げながら舞う姿と、両脇で花笠を被った少女たちがササラという竹製の楽器を鳴らす光景は、この地域の文化的特色を示している。

祭礼当日には、宮神輿に先立って氏子町会を「道行」(巡行)する姿が見られる。各神酒所では「辻舞い」が行われ、太鼓とササラ、囃子の音が町中に響いている。年長者は、笛や囃子を担当し、ひょっとこ面を被り、御幣を持って踊る「中踊り」も務めており、世代間での役割分担がなされている。東京都内では84箇所、区部では9箇所で獅子舞が確認されているが、六郷地区のように少年少女たちが中心となって演じる例は少ない。

この神獅子舞の歴史は19世紀以前にまでさかのぼることができる。『新編武蔵風土記稿(文化7年(1810)～文政9年(1829))』には、6月15日の祭礼日に神輿とともに獅子頭を持ち出すことや、かつては8月15日に舟で多摩川を下って羽田地区へ巡行していたが、水難事故により水路での巡行を中止し、日程も変更したことが記録されている。元々は土地の悪疫退散や雨乞いのための神事として、各地区を巡行して祓いの意味を込めた辻舞いが執り行われ、最後に神社へ戻って奉納されるという形式であった。

近代以降の変遷も明らかになっている。昭和13年(1938)から同23年(1948)まで戦争により休止した後、地域の人々によって再開した。平成19年(2007)の鎮座950年大祭までは、神社周囲を巡行して神楽殿で舞が奉納されるだけの限定的な実施だったが、同年に大田区の無形民俗文化財に指定されたことを契機として保存会が組織され、辻舞いや中踊りも再開された。現在では六郷神社周辺のみならず、近年では平成29年(2017)の神社座960年大祭において仲六郷1～4丁目町会や、西六郷1、2丁目町会、高畑3、4丁目町会へも巡行している様子が見られる。

地域の教育機関との連携も進んでいる。志茂田小学校では区独自教科「おおたの未来づくり」の研究実践として、こどもたちが六郷神社子ども神獅子舞保存会と協力する取組が行われた。保存会から「5年間のコロナ禍により小学生が卒業し、舞子が一



図2-2-24 道行(昭和47年(1972))



図2-2-25 辻舞い(昭和47年(1972))



図2-2-26 子ども神獅子舞(現在)

人もいないため、舞子を増やし、神獅子舞を再開させたい」という依頼を受けたこどもたちが、六郷神社へ出向き、神職及び神獅子舞の世話人から直接話を聞き、PRイベントを企画・実施した。PRイベントでは、六郷小学校3年生の児童及び近隣住民を対象に神獅子舞を募集した。こどもたちは、4月上旬から6月上旬までの約2ヶ月の間、小学校や幼稚園において、試行錯誤しながら、粘り強く神獅子舞の練習に取り組んでおり、周囲にはその声と音が響き渡っていた。この練習の結果、男女合計21名の新たな舞子を選出され、令和6年(2024)に神獅子舞が再び開催されるという具体的な成果につながった。

六郷神社の子ども神獅子舞からは、伝統行事が市街地景観の質を高める様子が見られる。鮮やかな獅子頭や花笠を身につけたこどもたちの巡行は、通常の街並みに彩りと活気をもたらし、辻舞いの場所には一時的な祝祭空間が生まれる。また、祭礼のために清掃・整備される神社周辺や道行経路は、定期的な環境美化の機会となっている。このように地域の文化的アイデンティティを視覚化する伝統行事を通して、日常的な都市空間に歴史的・文化的な奥行きを持たせた景観的価値が醸し出されている。

④まとめ

六郷神社の子ども神獅子舞は、多摩川下流域という水運の要所に発展した六郷地区の文化的象徴の1つである。1,000年近い歴史を持つ神社の祭礼行事として、世代を超えて継承されてきたこの神獅子舞は、地域の歴史的な蓄積を表している。

戦後の復興期から現代に至るまで、地域社会の変容に対応しながらも本質的な形式を保ち続け、平成19年(2007)の文化財指定を契機に新たな展開をみせた。特に注目すべきは、地域の教育機関との連携による文化継承の仕組みが構築されている点である。

六郷神社の本殿を中心とする歴史的建造物と、それを舞台に繰り広げられる子ども神獅子舞という無形の文化遺産が融合することで、都市化が進んだ現代においても、六郷地区の固有性を示す歴史的風致となっている。

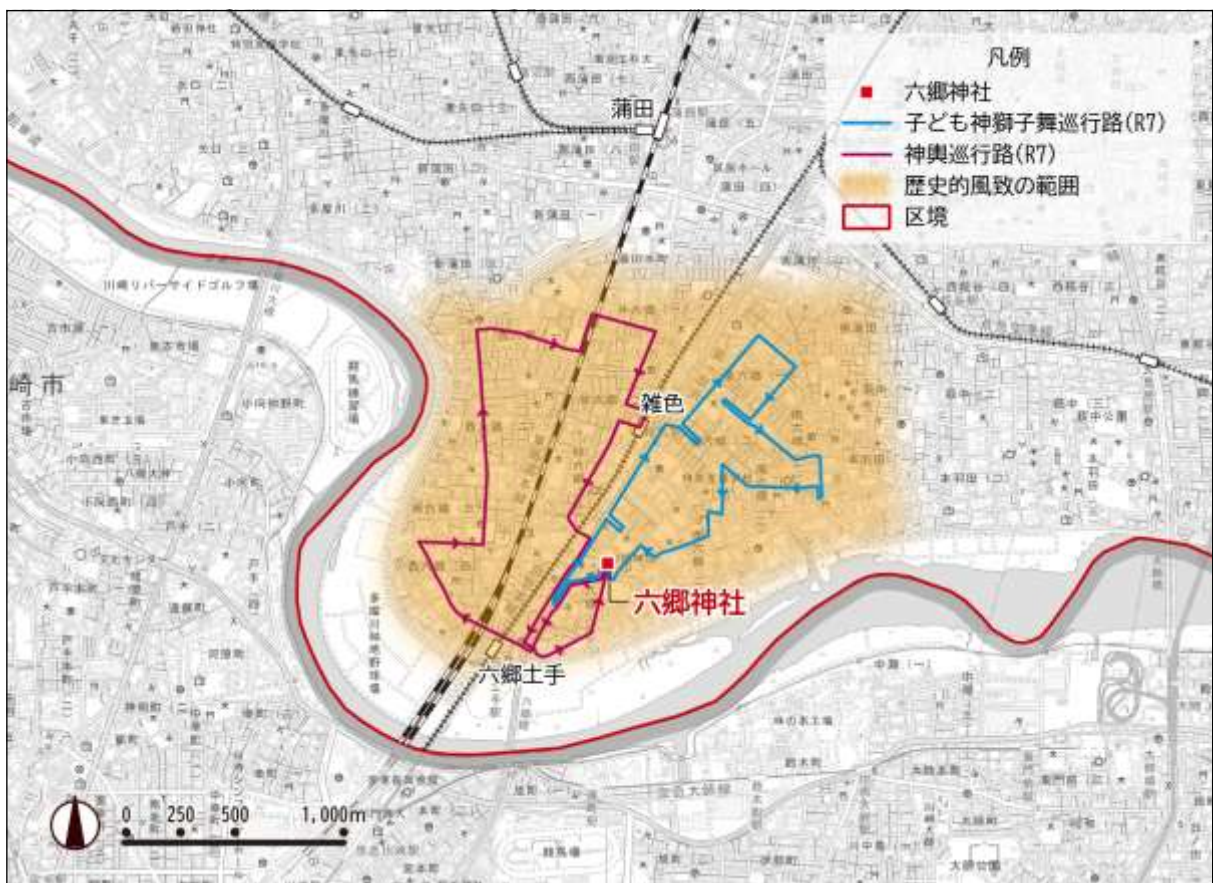


図 2-2-27 子ども神獅子舞にみる歴史的風致

(6)水止舞にみる歴史的風致

①はじめに

この地に鎮座する厳正寺は鎌倉時代から地域の精神的拠り所として人々の暮らしに寄り添い、海や水との共生を象徴する場となってきた。

長年受け継がれてきた水止舞は、水害と共に歩んできた人々の祈りが形となった貴重な文化遺産である。雨を求める祈りと大雨を止める祈願が一体となったこの伝統行事は、自然と向き合いながら生きてきた先人たちの知恵と信仰心を今に伝えている。

②建造物

ア. 厳正寺本堂

文永9年(1272)に北条重時の六男といわれる法円によって開山されたと伝えられており、当時は海岸寺と号した。

『大田区の文化財第八集(昭和47年(1972)、文化財専門員)』によると、昭和20年(1945)の東京大空襲により焼失したため、昭和37年(1962)に現在の本堂(鉄筋コンクリート造、瓦葺)が再建された。境内には聖徳太子絵像や大田区指定有形文化財の梵鐘(安永元年(1772)鑄造)等を所蔵している。



図2-2-28 厳正寺本堂

③活動

ア. 水止舞【東京都指定の無形民俗文化財】

厳正寺とその周辺で執り行われる水止舞は、毎年7月14日(令和3年からは原則7月第2日曜日に変更)に見ることができる盆の奉納舞である。一人立の3匹獅子舞の形式で継承されるこの民俗芸能は、古くから水害に悩まされた地域ならではの祈りを形にしたものである。雨を求める雨乞い(道行)と降りすぎた大雨を止める水止め(水止舞)の2部構成となっており、元亨元年(1321)から700年以上もの長い時を超えて受け継がれてきた。



図2-2-29 水止舞(昭和46年(1971))

水止舞は、大田区立大森第一小学校の校門前から約150メートル離れた厳正寺へ向かう「道行」から始まる。真夏の炎天下、行列の先頭には藁で編んだ縄(七五三縄)を渦巻き状に巻きあげた雌雄2匹の龍神の中で法螺貝を吹く大貝が運ばれる様子が見られる。バケツの水が空高く放り投げられ、真夏の青空に飛び散る水しぶきは沿道の

観客までもがびしょ濡れになる光景を作り出している。

行列は、藁の龍の大貝(左が雌、右が雄)2人を先頭に、続いて青竹で地面を叩き、牡丹の描かれた扇をかざす少年少女の警固、和敬幼稚園^{わきょう}の年長児が進む。その後に笛頭を先導役とした笛師連、花笠をかぶった花龍、太鼓を打ち鳴らす3匹の獅子が練り歩く。数メートルごとに立ち止まり、龍神に水がかけられる所作は、龍神を喜ばせるための雨を表現している。法螺貝の高らかな音色は雄叫びを表し、約30分かけて一行は境内の舞台を目指す。

厳正寺境内の舞台上では、藁がほどかれ、土俵状の輪が作られる。その後、花龍2人を従えた金面の雌獅子と黒い面の若獅子・赤い面の雄獅子による舞が始まる。「雌獅子の舞」から始まり、「出羽の舞」「大若女・水止め舞」「トービャーロ・コホホーンの舞」「雌獅子隠しの舞」と続く。特に「雌獅子隠しの舞」は水止舞で最高の舞とされている。笛と奉納唄、太鼓、花龍の持つ摺りササラが舞の囃子となる。水止舞の特徴として、他の地域の獅子舞に見られる褒め唄が存在しない点が挙げられる。

水止舞の由来は、『大森厳正寺由緒補鑑(明和7年(1779))』によれば、元享元年(1321)に厳正寺第2世法密が大旱魃に際して雨乞いの祈禱を行ったことに始まる。その2年後の元享3年(1323)には長雨が続いたため、法密が3像を彫って「水止」と号して舞わせ、雨を止めることに成功したとされる。

第2次世界大戦で踊り手を失って途絶えかけた「厳正寺舞」であったが、昭和29年(1954)に水止舞として再開した。昭和38年(1963)に東京都の無形民俗文化財に指定されると同時に水止舞保存協力会が発足し、伝統の継承に取り組んでいる。大貝の制作には海苔網の結び方が応用されており、かつて当該地域で海苔養殖を生業としていたことをうかがわせる貴重な伝統技術である。

700年以上にわたり守り継がれてきた水止舞からは、寺院とその周辺を含む地域空間が祭礼によって活性化される様子が見られる。この伝統行事には地元住民だけでなく外国人を含む多くの見物客が訪れ、地域の回遊性が高まるとともに、季節の風物詩として街並みに彩りを添えている様子が感じられる。



図 2-2-30 水止舞(昭和 47 年(1972))



図 2-2-31 水止舞の水がけ(現在)



図 2-2-32 水止舞(獅子舞)(現在)

④まとめ

水止舞は、大森地区において700年以上にわたり受け継がれてきた民俗芸能であり、水害との共存を余儀なくされた地域住民の自然への祈りを体現している。

戦後の困難な時期に一度途絶えかけたものの、地域住民の尽力により昭和 29 年(1954)に再開したこの民俗芸能は、大貝の制作に海苔網の結び方を応用するなど、かつての地域の生業と深く結びついた貴重な文化遺産である。昭和 38 年(1963)に東京都の無形民俗文化財に指定されたのと同時に発足した保存協力会の活動は、地域文化を守り継承する強い意志を表している。

鎌倉時代に起源を持つ厳正寺を舞台に、雨乞いの「道行」と大雨を止める「水止舞」という独特の2部構成で演じられる獅子舞と龍神の光景は、都市化が進んだ現代においても特別な祝祭空間を創出している。毎年7月に行われるこの伝統行事と、それを育んできた厳正寺の境内とその周辺環境が一体となった文化的景観は、大森地区における貴重な歴史的風致となっている。

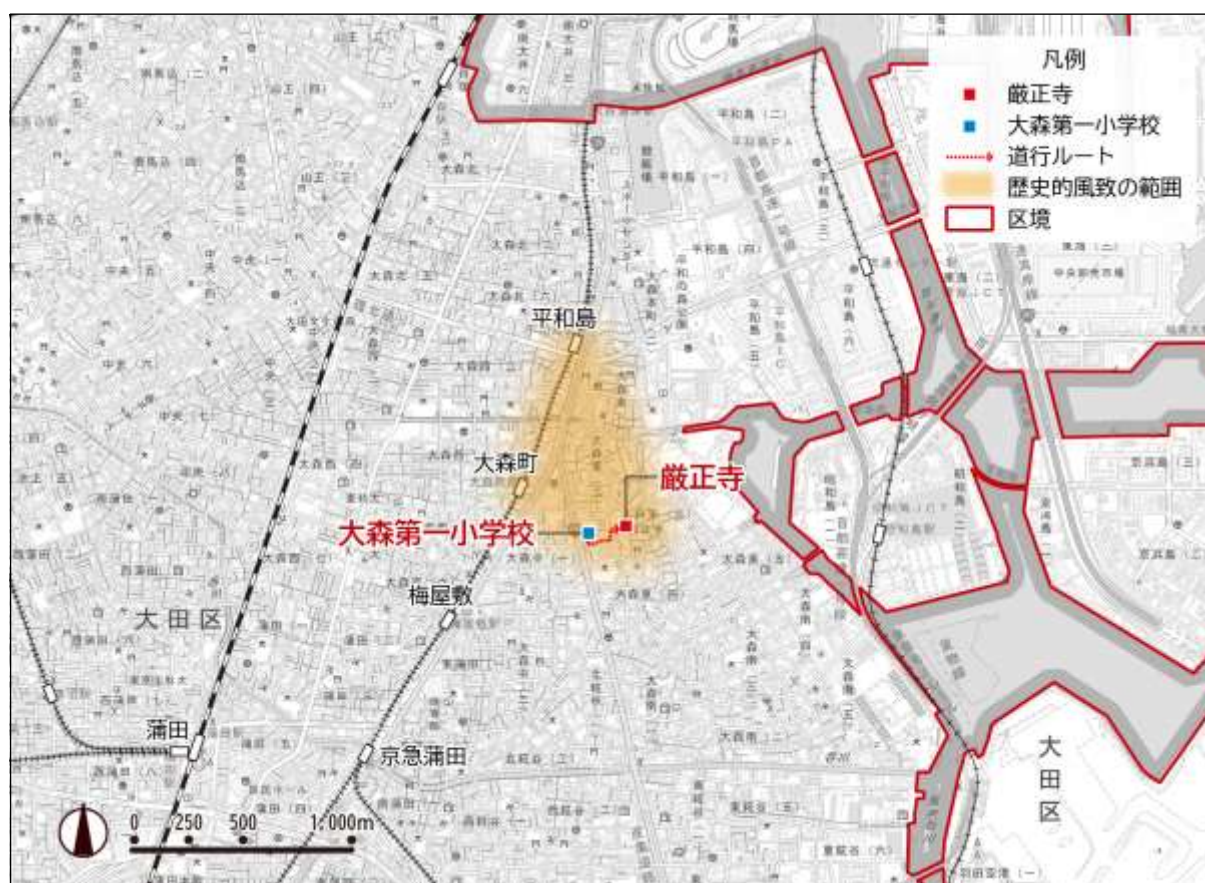


図 2-2-33 水止舞にみる歴史的風致

(7)双盤念仏にみる歴史的風致

①はじめに

大田区矢口地域に位置する今泉延命寺では、鉦と太鼓の音色が織りなす双盤念仏が今日まで継承されている。この伝統的な仏教行事は、かつて関東一帯で広く行われていたが、現代まで受け継がれている例は稀少である。

②建造物

ア. 今泉延命寺本堂

弘安年間(1278-1288)、白旗寂恵良暁によって開山された。

当初は「蓮花寺」と号し、現在の十寄神社付近に所在したと伝わるが、延文年中(1356-1360)に落雷で本堂と地蔵堂が焼失したと伝わる。この落雷は新田義興の怨霊が、自分を謀殺した江戸遠江守(江戸長門と比定される)めがけて落としたものだという逸話がある。

永禄年間(1558-1570)になり、芳誉は雷火から逃れた延命地蔵を安置する堂宇を再建し、その際に「延命寺」に改称した。本堂の向拝に飾られている彫刻によると、現在の本堂は、昭和33年(1958)年に再建されたものであり、木造、瓦葺、入母屋造となっている。



図 2-2-34 今泉延命寺本堂



図 2-2-35 今泉延命寺本堂の向拝に飾られている彫刻(昭和33年(1958)彫り)

③活動

ア. 双盤念仏【東京都指定の無形民俗文化財】

双盤念仏は、直径30～50センチメートルの鉦4つと長胴太鼓1つを用い、独特の節回しで念仏や阿弥陀名号を唱える伝統行事である。元々は1人の僧侶が2枚1組の鉦を使用したことから「双盤」の名称が生まれ、地域によっては「十夜念仏」「鉦はり」「流れ」「平鉦」「あそび鉦」とも呼ばれている。現在延命寺に伝わるものは全16曲からなり、完全演奏は45分に及ぶ荘厳な内容である。



図 2-2-36 双盤念仏(太鼓)(昭和51年(1976))

この伝統は平安時代、第3代天台座主・慈覚大師円仁によってもたらされた。円仁は唐に約10年滞在し、「引声の阿弥陀経と念仏」の曲節を習得して日本に伝えた。15世紀末に京都真如堂で十日十夜の法要として行われるようになり、室町時代には後土御門天皇の希望により鎌倉光明寺に伝わった。当初は浄土宗の僧侶による法要であったが、江戸時代には宗派を超えて民間にも浸透し、各地で鉦講や双盤講が結成された。明治から大正にかけて関東一帯で流行したが、戦時中の金属供出や戦後の信仰意識の変化により、多くの講が姿を消していった。

今泉延命寺の双盤念仏は江戸時代から約400年続く伝統であり、明治初期には講員が世田谷区の九品仏浄真寺で技法を研鑽した記録が残されている。かつては今泉延命寺の双盤念仏の講員が芝増上寺、川崎大師、芝赤羽橋の閻魔堂、喜多見慶元寺、車返本願寺、鎌倉光明寺など広域で奉納演奏を行っていた。第2次世界大戦中の空襲で延命寺一帯が焼失し、貴重な鉦や太鼓などの道具を失った今泉の双盤講は、一時は存続も危ぶまれた。しかし昭和39年(1964)に地域住民の寄付により新たな鉦と太鼓が奉納され、活動が再開された。多くの双盤講が消滅していくなか、地域の人々の熱意によって守り継がれてきた貴重な文化遺産である。

現在、延命寺では年間3回の法要(5月24日の施餓鬼、7月24日の地蔵祭り、10月24日の十夜法要)で双盤念仏が演奏されている。また、毎年秋に実施されている東京都文化財ウィークでの特別公開、九品仏浄真寺や芝増上寺での奉納演奏も行われている。これらの機会に訪れる人々は、厳かな雰囲気の中で奏でられる伝統的な音色に耳を傾け、独特の節回しによる念仏唱和に心を寄せる様子が見られる。

平成30年(2018)3月には、この貴重な文化財を保存・継承するため、講員と近隣の有志住民によって保存会が設立された。宗派や地域を越えた広がりを持つ保存会は、約100名の会員を擁している。

保存会の活動は伝統的な奉納演奏の継続と地域における文化継承活動の二本柱で展開されている。特に後者では、大田区立多摩川小学校・矢口小学校でのサマーワークショップ(令和●年度は小学生72名が参加)や「地域の学習」授



図2-2-37 双盤念仏(鉦)(昭和51年(1976))



図2-2-38 双盤念仏(施餓鬼会)(現在)



図2-2-39 サマーワークショップ

業での体験会、たまちゃんバスツアーでの親子向け体験会、七福神巡りでの演奏紹介など、地域のこどもたちや住民に双盤念仏の魅力を伝える取組が行われている。さらに、矢口地区自治会連合会主催「二十一世紀桜まつり」での展示・DVD 上映、矢口地区自治会連合会内にある掲示板への双盤念仏に関するポスター掲示など、地域団体との協働イベントや双盤念仏を周知する活動も積極的に実施されている。

400 年の歴史を持つ双盤念仏の継承活動により、延命寺が文化的拠点として活性化される様子が見られる。定期的な法要で行われる演奏は季節感ある景観を創出し、複数寺院間の文化的回遊性を高めている。また、学校や地域イベントでの演奏は公共空間に文化的価値を付加し、鉦と太鼓の音色は街の視覚的景観に聴覚的豊かさを加えている。こうした伝統文化の実践によって、都市空間に歴史的奥行きと文化的個性が感じられる。

④まとめ

双盤念仏は、矢口地域の今泉延命寺で 400 年以上にわたり継承されてきた伝統的な仏教行事である。この行事は、江戸時代から続くもので、念仏の奏楽を通じて地域の人々の結びつきを強化してきた。近代に入ると、多くの双盤講が消滅したが、今泉延命寺では昭和 39 年(1964)に地域住民の寄付により新たな鉦と太鼓が奉納され、双盤念仏が再開された。平成 30 年(2018)には保存会が設立され、伝統文化の継承と地域における文化活動の展開が進められ、約 100 名の会員がその活動を支えている。

また、今泉延命寺で行われる双盤念仏は、年間に 3 回の法要で演奏されるほか、地域の学校やイベントでのワークショップなどを通じて広く親しまれている。これにより、地域のこどもたちや住民が双盤念仏の魅力を体感する機会が増えている。

このように、双盤念仏は地域の文化的な拠点となり、鉦と太鼓の音色が地元の風景に聴覚的な豊かさをもたらしている。また、保存会の活動により、都市化が進展するなかでも伝統文化の価値が継承され、単なる仏教行事にとどまらない地域を象徴する重要な歴史的風致となっている。



図 2-2-40 双盤念仏にみる歴史的風致

(8)義民六人衆報恩感謝祭にみる歴史的風致

①はじめに

武蔵国荏原郡新井宿村(現：大田区山王付近)に根づく義民の記憶は、延宝年間(1673-1681)から340年以上にわたり、地域の人々の心に脈々と受け継がれてきた。

毎年2月の報恩感謝祭と5年に1度の特別な催しを加えた報恩感謝祭は、村の窮状を救うために命を捧げた間宮新五郎ら6人の農民を顕彰する伝統行事である。

■義民六人衆とは

義民六人衆とは、江戸時代中期の延宝年間(1673-1681)に、農民の窮状を救うために命を捧げた間宮新五郎をはじめとする武蔵国荏原郡新井宿村(現：大田区山王付近)の6人の農民のことを指す。

4代将軍徳川家綱の時代、新井宿村は度重なる干ばつや洪水などの自然災害に見舞われていた。それに加え、領主である木原家の圧政により、過酷な年貢取り立てが行われ、農民たちは極度の貧困状態に陥っていた。

村民たちはまず合法的な手段として、19箇条の訴状を領主に提出し、年貢の減免を願い出たが、この切実な訴えは完全に黙殺された。救済の道を絶たれたなか、間宮新五郎をはじめとする6人の農民たちは、最後の手段として将軍家綱に直接訴える「越訴」を計画した。当時の封建制度下では、領主を飛び越えて上位の権力者に訴え出ることは重大な違反行為であったが、彼らは村の存続をかけてこの危険な行動に出ようとしていた。

しかし、延宝5年(1677)1月2日の決行直前に密告により計画が露見し、全員が捕らえられた。6人は新井宿村の領主木原家の江戸屋敷に連行され、同年1月11日に全員処刑されるという悲劇的な結末を迎えた。

この6人は、私利私欲ではなく村全体の窮状を救おうとして命を捧げたことから、後世「義民」として称えられるようになった。彼らの勇気ある行動と犠牲は、民衆の記憶に深く刻まれ、現在でも地域の歴史に重要な出来事として語り継がれている。



図 2-2-41 新井宿村周辺の千須(明治44年(1911)当時の旗本木原家の領地)



図 2-2-42 19箇条の訴状

②建造物

ア. 善慶寺本堂

善慶寺は正応4年(1291)に創建された日蓮宗の寺院である。創建当初は法光山と称し、日法をもって開基とし、身延を総本山とする一致派に属していたが、後に日什門流となり、現在は日蓮宗に包括されている。

『大田区の文化財第八集(昭和47年(1972)、文化財専門員)』によると、昭和初期まで本堂は四間四面の草葺で、わずかに庫裡を加えた程度であったが、昭和5年(1930)に現在の木造瓦葺の本堂と書院が建立された。昭和46年(1971)に門前78坪の宅地を買収して境内地を拡張し、墓域を境内地に移転、本堂内陣の改修等内外の環境が整備された。

本堂には東京都指定有形文化財「新井宿村名主惣百姓等訴状写」が所蔵されている。また、伝承どおり発掘された納骨ののり甕や、六人衆の遺体引き取りに使役した2頭の馬の飼葉桶が展示されている。

イ. 新井宿義民六人衆墓【東京都指定の史跡】

延宝7年(1679)間宮藤八郎により建立された高さ150センチメートルの墓石である。

間宮藤八郎の父母の墓という名目で建てたこの墓石には、正面に藤八郎の父母の法名があり、裏面には他人の目を避けるように処刑された6人の法名が刻まれており、墓参すると義民六人衆を同時に供養できる工夫が施されている。昭和6年(1931)に東京府(現：東京都)指定の史跡となった。



図 2-2-43 善慶寺本堂(昭和初期)



図 2-2-44 善慶寺本堂(平成 28 年(2016))



図 2-2-45 新井宿義民六人衆の墓

③活動

ア.義民六人衆顕彰会

義民六人衆顕彰会とは、村民のために犠牲となった六人衆の事蹟を顕彰し、新井宿に育った義民の精神を郷土の文化として後世に語り継ぐことを目的とした団体である。

延宝5年(1677)に六人衆全員が処刑された事件以降、六人衆は罪人として扱われていたため、供養は密かに行われていた。しかし、明治34年(1901)に六人衆の末裔である間宮新太郎家から19か状の訴状の控えが発見され、この事件は末裔以外の人々にも伝わることとなった。大正5年(1916)に六新講が設立され、初めて六人衆の供養が公に行われた。その後、六新講の活動が報徳会に引き継がれ、義民六人衆を顕彰する活動が行われていたが、戦争により顕彰活動は一時休止となった。

明治末期より、六士講、義民報徳会、善慶寺法光会等の諸団体が義民六人衆を顕彰する活動を行ってきた。戦後は、六士講が中心となってこれらの顕彰運動が継続されてきた。

『義民六人衆(昭和31年(1956)4月)』によると、世の中が落ち着きを取り戻した昭和31年(1956)4月に義民六人衆280回忌を迎えるに当たり、「義民六人衆顕彰会」が結成された。顕彰会は「義民六人衆の事蹟は単に280年前の昔語りに過ぎないものではなく、現代に生きる精神でなければならない」という考えのもと、義民六人衆の顕彰を推進することを目的に、毎年2月、善慶寺で義民六人衆の霊を供養する報恩感謝祭を開催し、六人衆の義挙を追悼し、その道徳を称えている。また、地域住民向けに歴史講演会や善慶寺などの史跡見学会を実施しており、六人衆の遺志を継ぎ、その崇高な精神に思いを馳せようとする地域の思いが感じられる。



図 2-2-46 六新講の設立(除幕式)
(大正5年(1916)5月28日)



図 2-2-47 六新講(現在)



図 2-2-48 義民六人衆墓参の様子



図 2-2-49 講演会の様子

イ. 義民六人衆報恩感謝祭

義民六人衆報恩感謝祭は、村民のために犠牲となった六人衆の事蹟を顕彰し、新井宿に育った義民の精神を郷土の文化として後世に語り継ぐことを目的とした行事である。「語り継ごう・わが町に・命をかけた・六人の勇気」を合言葉に、六人衆の末裔や地域の人々により、毎年2月11日に報恩感謝祭が執り行われている。

5年に1度の特別な催しを加えた報恩感謝祭は4月第2日曜日に実施し、六人衆仮装パレード及び法要講演を実施している。六人衆仮装パレードは、大森駅付近の日枝神社を出発点とし、善慶寺までの約1キロメートルの道のりで行われる。このパレードには六人衆に扮した6人の男性をはじめ、お稚児さん、六士講、交通少年団など多くの参加者が集い、プラカードを掲げながら行進しており、幅広い世代に六人衆顕彰会の活動を広める様子が見られる。

善慶寺に到着後は法要が営まれ、墓参りを行った後、最後に「ねぎぬた供養」を行っている。

「ねぎぬた供養」とは、ねぎを茹でて酢味噌で和えた伝統食「ねぎぬた」を参加者が共に味わう。これは当時から食されてきた料理であり、先人たちの暮らしを実感する意味深い儀式となっている。

この報恩感謝祭では義民六人衆の遺徳を偲ぶ様々な活動を通して、地域の人々の、先人の献身と勇気の精神を大切に守り、次世代に伝えていこうという信念が感じられる。さらに、パレードを行進する人々の色鮮やかな衣装や法要を通じた住民の交流と社寺の活用からは、歴史と文化が息づく街並みの形成や、大森地区の豊かな都市環境の維持向上に貢献していこうとする様子が見られる。

調整中

図 2-2-50 義民六人衆報恩感謝祭
(※50 年前の祭りの風景)



図 2-2-51 義民六人衆報恩感謝祭(5年に1度)
(平成 28 年(2016))



図 2-2-52 ねぎぬた供養



図 2-2-53 ねぎぬた

④まとめ

善慶寺における義民六人衆の顕彰活動は、340年以上にわたって継承され、地域の重要な文化として定着している。善慶寺及び東京都指定の史跡となった義民六人衆墓では、毎年2月に報恩感謝祭が行われ、領主の圧政から村を救おうとして命を捧げた6人の農民の精神への感謝と敬意が現在も継承されている。

また、5年に1度の特別な催しを加えた報恩感謝祭では六人衆仮装パレードやねぎぬた供養などが執り行われ、「語り継ごう・わが町に・命をかけた・6人の勇気」という理念のもと、地域住民が積極的に参加している。善慶寺と義民六人衆墓を中心に行われるこれらの祭礼行事は、自己犠牲と共同体精神という価値観を現代に伝えており、都市化が進むなかにあっても、歴史的風致をみることができる。

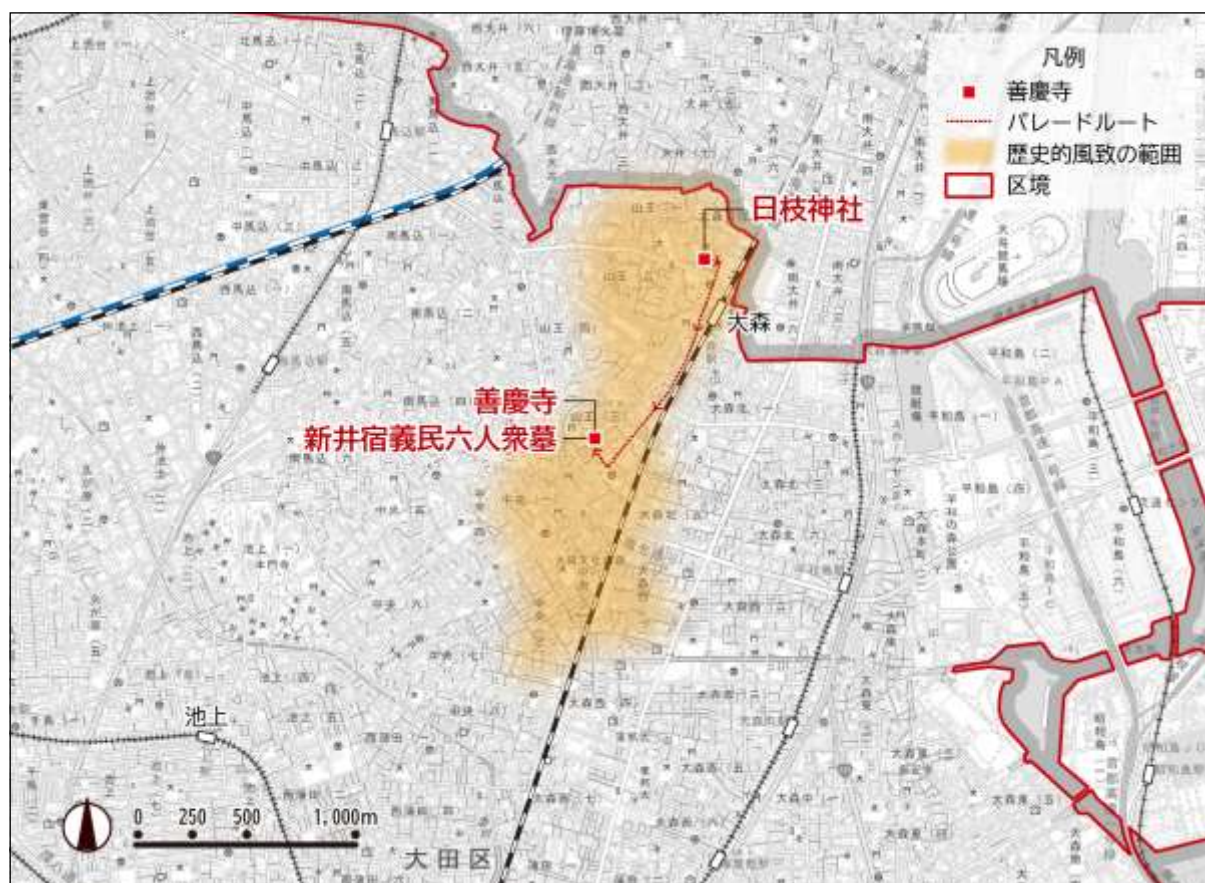


図 2-2-54 義民六人衆報恩感謝祭にみる歴史的風致

(9)子ども流鏝馬にみる歴史的風致

①はじめに

六郷地域に鎮座する六郷神社は、平安時代から地域の精神文化を支え続けてきた歴史ある神社である。その境内で執り行われる子ども流鏝馬は、**こども**たちが主役となる珍しい神事として知られている。

②建造物

ア.六郷神社（再掲）

天喜5年(1057)に源頼義と源義家が奥羽地方の平定に向かう途中、この地を訪れ、ここにあった古い杉の木に白旗を掛け、石清水八幡に武運長久を祈願したところ、士気が大いにふり、前九年の役に勝利を収めたため、その分霊を勧請したのが創建とされている。社殿は本殿、幣殿、拝殿の3つで構成されている。本殿は三間社流造、屋根は銅板葺であり、木造である。棟



図 2-2-55 六郷神社

札によると、享保4年(1719)の建立と推定される。また、幣殿は切妻造で、昭和42年(1967)頃の建立と推定されるが、昭和62年(1987)に改築されている。拝殿は切妻造向拝付で、大正10年(1921)頃の建立と推定されるが、幣殿と同じく昭和62年(1987)に改築されている。いずれも木造で、屋根は銅板葺である。

③活動

ア.子ども流鏝馬【東京都指定の無形民俗文化財】

毎年1月7日の人日の節句に行われる、男子の開運・健康・出世を祈る伝統神事である。一般的にイメージされる馬を駆けながら行う流鏝馬と異なり、六郷神社の流鏝馬は歩射^{ぶしや}、転じて「おびしゃ」と呼ばれる、的の手前まで歩いてから弓を射る形式で執り行われる。祭りの主役は男児であり、綾藺笠^{あやいがさ}を被り、直垂^{ひたれ}に両足を保護する行縢^{むかばき}をまとった本格的な格好で登場する。袴姿に刀を差した男児が射手となり、射場を歩いて的のそばに進む独特の作法が特徴である。鎌倉幕府を開いた源頼朝が、先祖である頼義・義家にあやかって当社を参拝したところ戦勝をおさめたので、流鏝馬を奉納したことが発祥と伝わる。



図 2-2-56 子ども流鏝馬(昭和46年(1971))

射手は、白布に描かれた6尺四方の垂れ幕の中心に、内・上・外・下を見つめる4対

の鬼の目玉「^{はっぼうにらみ}八方白眼」と呼ばれる的に向かって矢を放つ。この的は、丸い輪の中に八つの異なる眉と目を描いたものであり、社前に設けられた射場には、18本の青竹を矢来に組んでヨシズを張り、その上に和紙で作られた八方白眼を配置する。射手は椿の弓に篠竹の矢をつがえ、2人1組でこの的を射抜く。。かつては六郷の中でも限られた地区に住む、13歳以下の長男だけが射手を務めていたが、現在では六郷全域から参加者を募り、多くの児童が健康・出世を願い、弓を射る様子が見られる。こどもたちは緊張しながらも真剣な表情で弓を引き、的に当たると嬉しそうな笑顔を見せ、会場は温かい雰囲気にも包まれるとともに、観客からは拍手や歓声が聞こえてくる。また、平成10年(1998)からは鎌倉にある鶴岡八幡宮で流鏝馬練習に用いられるものになって作られたというレール式の木馬も導入され、八方白眼の前に置かれた的まで近づき矢を射る新たな方法も取り入れられており、興行性も向上している。

こどもが主体となって行う珍しい歩射行事として、この神事は東京都の無形民俗文化財に指定されており、伝統と可愛らしさが融合した心温まる行事である。

この伝統神事は、六郷神社の氏子や総代を中心とした地域住民によって継承されている。古式に則った形式を維持するため、地域の長老から若い世代への技術継承が丁寧に行われており、伝統の正確な保存と次世代への伝達が重視されている。

かつては地域内の小規模な行事であったが、昭和後期になると、その歴史的・文化的価値が再認識されるようになった。地域の有志が中心となり、神事の記録や写真の保存、関連資料の収集を行うなど、子ども流鏝馬の歴史と意義を記録する活動が開始された。これらの地道な活動は、急速な都市化が進むなかで伝統文化が失われることへの危機感から生まれたものであり、後の文化財指定への基盤となった。

現在、保存団体は地域の学校教育との連携も図っており、地元小学校の総合的な学習の時間を活用した歴史・文化教育を実施している。また、子ども流鏝馬を紹介するパンフレットの作成・配布や、神事の様子を記録した映像資料の制作なども行っている。さらに、神事当日には地元の菓子店が特製の「流鏝馬もなか」を販売するなど、地域全体で伝統行事を



図 2-2-57 子ども流鏝馬(令和2年(2020))



図 2-2-58 子ども流鏝馬(令和2年(2020))



図 2-2-59 子ども流鏝馬(令和7年(2025))

支える体制が構築されている。

これらの保存活動によって、六郷神社の子ども流鏝馬が執り行われる神事の場合には、古式に則った装束に身を包むこどもたちの姿を通して、何世代にもわたり大切に継承されてきた伝統の尊さと、それを守り育てる地域の強い絆を感じることができる。

④まとめ

六郷神社の子ども流鏝馬は、平安時代から続く神社の歴史と地域文化が融合した神事であり、歴史的建造物である神社を舞台に、古式に則った独特の作法で執り行われている。伝統的な裃姿のこどもたちが八方白眼の的に向かって矢を放つ光景は、現代の都市景観のなかに特別な歴史的情景を創出している。

この神事は地域住民の継続的な保存活動によって支えられ、学校教育との連携や様々な普及活動を通じて、次世代への継承が図られている。こどもたちが主役となるこの伝統行事は、地域のアイデンティティを形成し、世代間の絆を強化する役割も担っている。

こうして、1,000年の時を越えて受け継がれてきた六郷神社の子ども流鏝馬は、江戸時代の面影を残す社殿と人日の節句に響く射手の掛け声、厳かな儀式を見守る地域の人々の姿が織りなす、この地区特有の歴史的風致となっている。

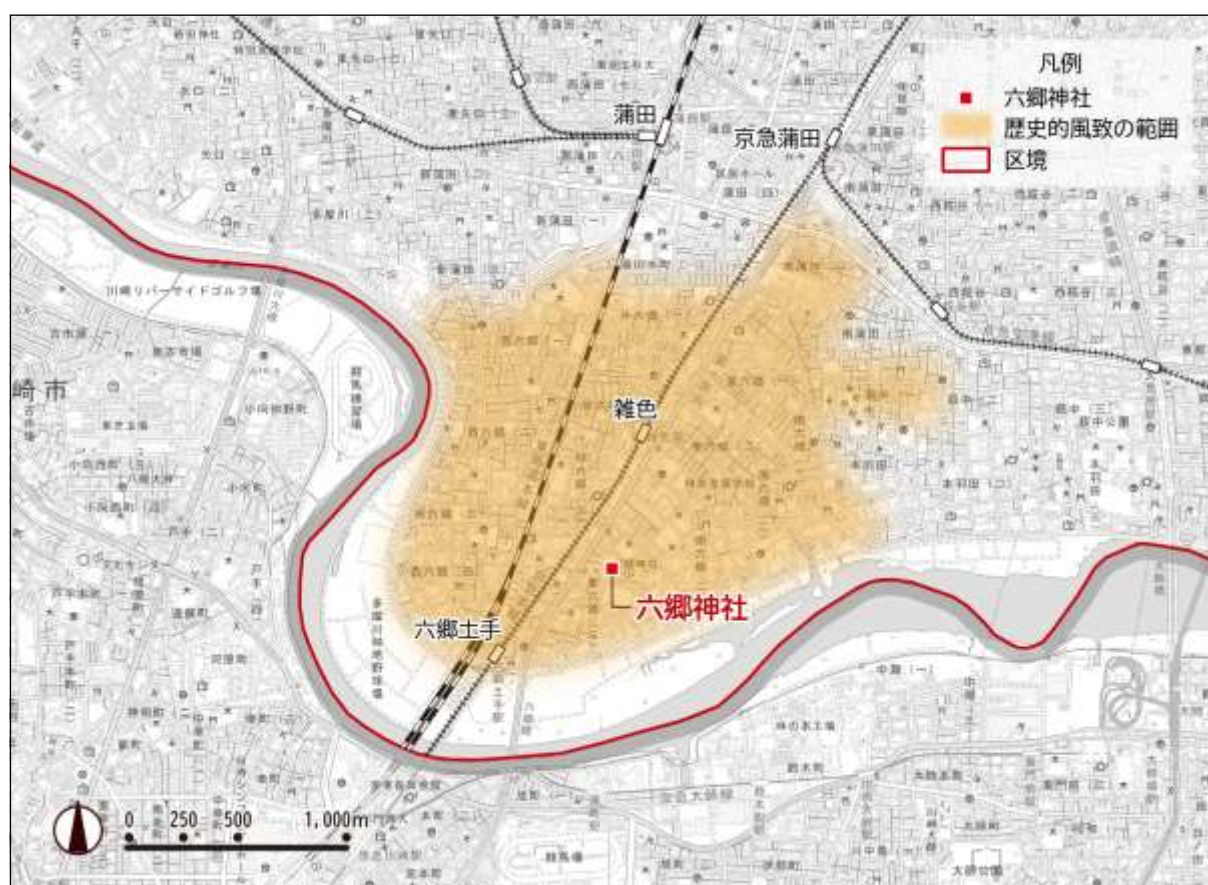


図 2-2-60 子ども流鏝馬にみる歴史的風致

2-3. 天然鉱泉を用いた入浴文化にみる歴史的風致

(1)はじめに

大田区の銭湯営業数は東京 23 区で最多を誇り、大田浴場連合会は「銭湯特区」と銘打って積極的な活動を続けている。その最大の特徴となるのが、太古の植物性物質が堆積した地層から湧出する、通称「黒湯」である。火山性温泉とは異なり、海洋性である黒湯の多くは源泉温度が低い「冷鉱泉」に分類される。区内の銭湯においてはこうした天然鉱泉をそのまま水風呂としたり、適温まで沸かしてから浴室に供給したりしている。

区内の入浴文化としては、鉱泉発見以前である江戸時代の頃より、羽田獺師町をはじめとした漁村域において湯屋が営業していたことが知られる。これは、海の仕事によって潮を浴びるので、毎日湯につかる必要があったためである。区内の銭湯分布は全域に及ぶため、必ずしも漁村と銭湯(湯屋)の展開が直接結びつくものではないが、『大田区史 資料編(民俗)(昭和 58 年(1983))』によると羽田地域においては各家庭で内湯を持たない頃に同じ町会の人々が同じ湯屋に集まっていたとあることから、祭りと同様に地域コミュニティ形成のために欠くことのできない空間となっていた。重の湯は、そうした羽田地域の入浴文化を今に伝える施設といえる。

(2)建造物

①重乃湯

『大田区歴史的建造物調査報告書(平成 30 年(2018))』によれば、昭和 28 年(1953)に増築が行われており、当初は「小川湯」という名称であったことがわかる。

入口部分は瓦葺の入母屋屋根の破風面を見せ、脱衣場部分の大きな瓦葺、平入の入母屋屋根に直行するように配される。浴場部分は妻入の大きな切妻屋根で、脱衣場から直行して配されて



図 2-3-1 重乃湯

いる。男湯と女湯で左右対称の間取りだが、男湯の入口近くには庭が併設されている。

入口及び脱衣場の天井は、戦前期に流行した宮造り銭湯の特徴である折り上げ格天井となっている。浴場正面の壁にはペンキ絵が描かれる。

②明神湯

『大田区歴史的建造物調査報告書(平成 30 年(2018))』によれば、昭和 32 年(1957)の建築である。

入口部分は唐破風、脱衣場ならびに浴場部分が大きな瓦葺の入母屋屋根で、その入母屋の破風面をそのまま見せている。このような唐破風と入母屋破風を重ねた外観は、戦前期に流行した宮造り銭湯の特徴を備えたものである。脱衣場の折り上げ格天井についても、同じく宮造り銭湯の伝統的技法となる。間取りは男湯と女湯でほぼ左右対称だが、男湯側には縁側と庭が設けられている。浴場正面の壁にはペンキ絵が描かれる。令和 7 年度に東京都選定歴史的建造物に選定された。



図 2-3-2 明神湯

③太平湯

『大田区歴史的建造物調査報告書(平成 30 年(2018))』によれば、昭和 41 年(1966)の建築(再建)である。

屋根形式は瓦葺の入母屋屋根であり、宮造りの外観を呈している。正面に破風が向けられる平入の入口となる。脱衣場の天井は格天井とはなっておらず、重の湯、明神湯と比較して建築年代が新しいことから、戦前の様式が薄れてきた頃の新形態を表しているものと考えられる。浴場正面の壁にはペンキ絵が描かれる。



図 2-3-3 太平湯

(3)活動

①天然鉱泉を用いた入浴施設の営業

大田区における天然鉱泉の利用は、明治 32 年(1899)に発見された森ヶ崎鉱泉に端を発する。

内務省東京衛生試験所が分析した結果、ラジウムエmanaチオンを含むアルカリ性食塩泉であることがわかり、その浴効を売りに次々と鉱泉旅館が建てられた。東海道沿線に立地することや、付近には海水浴場も開設されていたことから、東京近郊の保養地として人気を博した。鉱



図 2-3-4 銭湯の番台

泉街には 20 数軒の旅館や料理屋が立ち並び、文人や財政界人も数多く来遊していたことが記録されている。また、東京都心から近距離かつ臨海部の静かな土地であったことから、療養所として鉱泉病院(現：東京労災病院)も設立された。

このように、元来銭湯をはじめとした入浴施設及びその行為は、日常的な時間や空間とは切り離された娯乐的(あるいは宗教的)要素を持つことが本質であり、日常生活の中においては特別なものである。とりわけ、大正期以前の農漁村部であれば、娯楽となる媒体そのものが限定されるため、健康促進のため以上に、非日常性を求めて入浴施設を利用する者が多かった。明治期以降の区内における天然鉱泉または湧水利用の入浴施設事例としては、前述した森ヶ崎鉱泉のほか、池上温泉「あけぼの楼」、多摩川園等が挙げられるが、いずれも現在では廃業している。一方で、地下 2,000 メートルからくみ上げた源泉を使用して昭和 30 年代前半に開業した平和島温泉(現：平和島クアハウス)は、現在も大型レジャー施設「ビッグファン平和島」の一部として営業を続けており、臨海部の保養地としての景観を残している。

大田区で営業する一般的な「銭湯」については、昭和 4 年(1929)に創業した改正湯、昭和 12 年(1937)に創業した蒲田温泉のように、戦前から黒湯を提供していた例は見られるものの、全体としては戦後期に都内で需要が高まったことにより新規参入した店舗がその多くを占める。戦時下においては物資不足や国家総動員体制により、東京市内で約 2,800 軒あった銭湯が約 400 軒にまで減少したが、戦後 20 年で再び約 2,200 軒に増加した。東京都浴場組合のホームページによれば、大田区でも最盛期となる昭和 40 年(1975)頃には 188 軒の銭湯が営業していた。

都内の銭湯を象徴する建築様式に、上記で紹介した宮造りの意匠が見られる。これは大正 12 年(1923)に発生した関東大震災以降、社寺建築を思わせる重厚な外観と広い浴場を持つ「東京型銭湯」が登場したことに由来する。震災での倒壊を免れた銀座の歌舞伎座にあやかったともいわれているが、復興の象徴として人々を元気づけるため、日常生活の中にある非日常性を演出する効果を持たせたと考えられている。また、銭湯の外観的特徴として煙突の存在がある。営業時間が近づくと湯を沸かすためにボイラーに火が入れられ、煙突から煙が上るさまは、周辺にマンションが立ち並ぶようになった現在でも遠目から確認することができ、生活環境が変わっても銭湯が不動の存在として地域に根付いていることを感じさせる。



図 2-3-5 銭湯(煙突の煙)

表 2-3-1 大田浴場連合会に加盟する銭湯

煙突の有無は組合に確認中

加盟店※ ¹	所在地	宮造り	煙突の有無	【活動】 50 年以上継続している浴場	
				50 年以上	営業許可年※ ²
新呑川湯	大森南一丁目				昭和 58 年 (1983)
天狗湯	大森西二丁目			●	昭和 35 年 (1960)
大森湯	大森西三丁目				平成 14 年 (2002)
あたり湯	大森西三丁目				昭和 56 年 (1981)
久松 温泉	池上三丁目				昭和 58 年 (1983)
桜館	池上六丁目				昭和 57 年 (1982)
調布弁天湯	北嶺町				昭和 62 年 (1987)
第二栗の湯	鵜の木二丁目			●	昭和 47 年 (1972)
COCOFURO ますの湯	南久が原二丁目				平成 30 年 (1955)
久が原湯	久が原二丁目			●	昭和 48 年 (1973)
八幡浴場	南千束三丁目				昭和 51 年 (1976)
明神湯	南雪谷五丁目	●		●	昭和 38 年 (1963)
宝湯	東糀谷三丁目			●	昭和 47 年 (1972)
幸の湯	西糀谷一丁目				平成 10 年 (1998)
観音湯	西糀谷三丁目				平成 19 年 (2007)
竹の湯	羽田一丁目				昭和 61 年 (1986)
重乃湯	羽田三丁目	●		●	昭和 43 年 (1968)
第一相模湯	西六郷二丁目				昭和 53 年 (1978)
太平湯	南六郷一丁目	●			平成 5 年 (1993)
第五相模湯	南六郷二丁目			●	昭和 48 年 (1973)
天然温泉 NU-LAND さがみゆ	仲六郷二丁目				平成 7 年 (1995)
COCOFURO たかの湯	仲六郷二丁目				令和 4 年 (2022)
照の湯	仲六郷三丁目				平成 1 年 (1989)
都湯	下丸子四丁目				昭和 58 年 (1983)
新田浴場	矢口二丁目				平成 29 年 (2017)
草津湯	東矢口二丁目				昭和 62 年 (1987)
大正湯	東蒲田一丁目				昭和 63 年 (1988)
天神湯	南蒲田一丁目				平成 8 年 (1996)
改正湯	西蒲田五丁目			●	昭和 45 年 (1970)
はすぬま温泉	西蒲田六丁目				昭和 54 年 (1979)
蒲田福の湯	蒲田一丁目				平成 28 年 (2016)
ゆーシティー蒲田	蒲田一丁目				平成 5 年 (1993)
寿湯	蒲田三丁目				平成 17 年 (2005)
蒲田温泉	蒲田本町二丁目				昭和 60 年 (1985)

※ 1 : 上記の浴場(銭湯)には、現在休業中のものも含む。

※ 2 : 所管保健所による浴場の営業許可年のこと。

②銭湯に通う人々

利用者から長らく愛されているというのも銭湯の姿である。大田区においては前述したように漁村民のため、また主に大正期以降からは町工場の進出に伴う工員達が利用するため、地域の拠り所として銭湯が存在した。さらに黒湯をはじめとした天然鉱泉がもたらす保養効果を求めての利用等、古くから身近に公衆浴場が存在する環境であった。

各家庭に風呂が普及したのが一般的となった現代社会においても、自宅では味わえない大きな浴槽や湯上りの休み処での一服を求めて、また昨今ブームとなっているサウナの利用を目的として、地域住民だけでなく遠方の銭湯ファンやサウナファンが各銭湯を訪れている。昭和44年(1969)1月12日の『読売新聞』の朝刊の記事によれば、家風呂の普及によって経営難に陥った銭湯がサウナ業に転業したとされる。また、昭和46年(1971)8月13日の『同新聞』

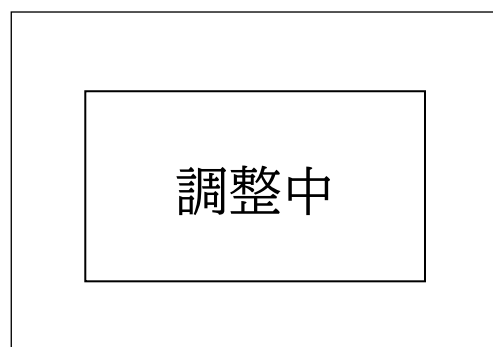


図2-3-6 銭湯に通う人々

記事では、「都内の公衆浴場は、サウナプロを併営して経営不振を打開するとよい」という提案が都公衆浴場問題協議会で示されたとあり、試行錯誤の銭湯経営の中で、家風呂との差別化を図りつつ利用者のニーズに応えるかたちで現在のサウナ併設型銭湯が生み出されたことがわかる。つまり、主に昭和40年代以降の銭湯利用者については、一定数がサウナ目的であったことが示唆され、彼らによって現在のサウナブームに至る「新入浴文化」が形成されたといえることができる。こうした紆余曲折を経て、その後の銭湯の営業方針ならびに利用目的が確立されていった。とはいえ、従来からの風習であるこどもの日の菖蒲湯や冬至の日のゆず湯など、四季折々の伝統文化を体験できる場としても、今もなお幅広い世代から利用され、地域の賑わいを創出する空間となっていることも確かである。現在も年間を通して、夕暮れ時には風呂桶を抱えて銭湯に向かう人や、濡れた髪をタオルで包みながら家路につく人を見かけられ、地域のシンボル、憩いの場として銭湯が定着している様子を見ることができる。

③大田浴場連合会(東京都浴場組合)

昭和32年(1957)に設立された東京都浴場組合に、令和6年(2024)時点で区内32軒の銭湯が加盟しており、その支部として大田浴場連合会が●年から運営されている。かつての銭湯は、健康促進のほかに地域の人々の交流



図2-3-7 大田浴場連合会のHP

の場としての目的をもって利用する者が多くみられたが、現在、大田浴場連合会では、さらに「銭湯を世界に誇れるコミュニティスポットに」として国境や言語、世代を超えて交流を深める場にすることを目指している。令和6年(2024)からは、東京都と東京都浴場組合が連携し、10月10日の「銭湯の日」にちなんで、秋から冬にかけて、外国人観光客に喜ばれる体験型観光コンテンツとして「WELCOME! SENTO Campaign」を打ち出している。

このように、重の湯や明神湯に見られる宮造りの銭湯は、地域のシンボルであるばかりでなく、日本の伝統文化を継承する建造物として、海外からも高い注目を集めている。

(4)まとめ

大田区における天然鉱泉を用いた入浴文化は、黒湯をはじめとした鉱泉の湧出や豊かな湧水という地理的環境に加え、漁村における衛生面の確保や、東京近郊での保養地開発などの社会的環境も相まって、特に近代以降から現代にかけて公衆浴場の発展というかたちで特色ある歴史的風致を形成してきた。それはまさに東京都の公衆浴場史そのものを示しており、最多の銭湯営業数を誇る大田区であるからこそ変遷を辿ることができるという強みを持つ。

現代の銭湯における、家庭の浴室では味わえない解放感や他者との交流という非日常性は、入浴という行為そのものの本質を継承する、日本の伝統文化である。大田区はその中でも「銭湯特区」として、鉱泉の活用と地域交流の創出という従来の形態を守りつつ、外国人観光客など新しい客層の取り込みにも力を注ぎ、最前線で伝統と革新の両立を目指している。こうした各銭湯の取組と、それに応じたさまざまな利用者の往来によって、大田区ならではの入浴文化を受け継いだ歴史的風致が形成されている。

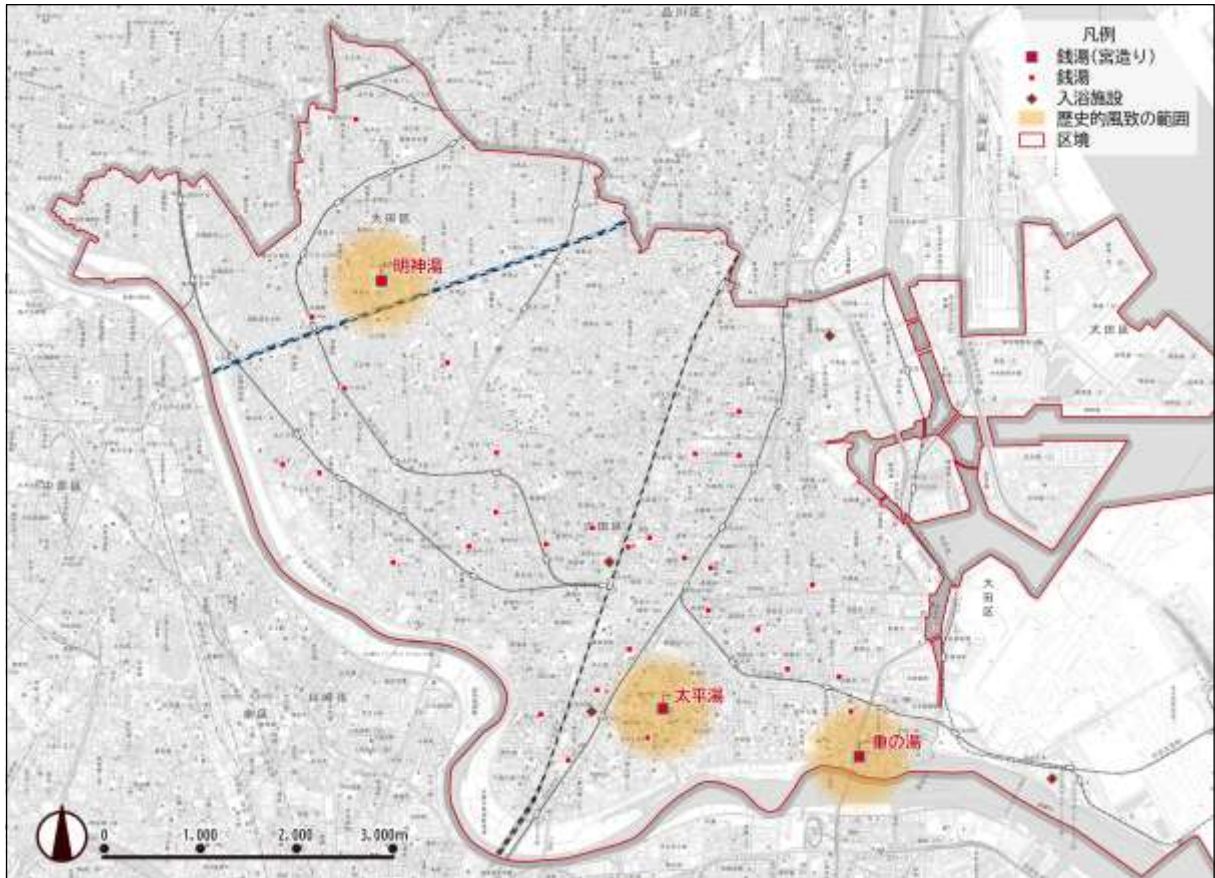


図 2-3-8 天然鉱泉を用いた入浴文化にみる歴史的風致の範囲

2-4. 洗足池の景観保全にみる歴史的風致

(1)はじめに

洗足池は、かつては「千束郷の大池」や「千束池」と呼ばれていたが、日蓮宗開祖の日蓮が池畔で手足を洗ったという伝承から「洗足池」と称されるようになった。江戸時代から景勝地として知られ、初代歌川広重の浮世絵に描かれたほか、昭和3年(1928)には川瀬巴水の版画にも題材として取り上げられるなど、時代を超えて芸術家たちに愛された場所である。幕末に訪れた勝海舟がこの地を気に入り、後に別荘を構え、遺言により池畔に墓所が設けられる等、歴史上の人物とのつながりも深く、池周辺には多くの歴史文化資源が点在している。

長い歴史を持つ洗足池は、江戸時代から景勝地として親しまれ、大正・昭和初期には行楽地としても人気を集めた。その価値は早くから認められ、昭和5年(1930)に風致地区に指定され、昭和7年(1932)には東京市八名勝に選定された。

現在、洗足池は区立洗足池公園として整備されており、開放的で美しい水辺と都市部に残る貴重な緑が調和する都市景観を形成している。周囲には緑豊かな住宅地や社寺、勝海舟記念館(旧清明文庫)などが分布し、自然、歴史、文化が揃う複合的な魅力を持つ空間となっている。

洗足池公園を舞台とした伝統行事や環境保全活動は継続的に行われており、特に、昭和8年(1933)に地元名望家により設立された社団法人洗足風致協会(現:(公社)洗足風致協会)は、風致保全と美化活動に長年取り組んでいる。同協会が主催する「ほたるの夕べ」や「春宵の響」といった代表的な催しは、多くの来訪者を呼び寄せるとともに、地域の風致意識の醸成に重要な役割を果たしている。

都市化が進む東京において、洗足池は、その歴史的価値と自然環境の両面で重要性を増している。今後も、この貴重な景観を地域共有の財産として大切に守り、次世代に引き継いでいくことが求められている。



図2-4-1 歌川広重による浮世絵図
「名所江戸百景 千束の池袈裟懸松」



図2-4-2 川瀬巴水「千束池」

(2) 建造物

① 洗足池公園

洗足池公園の総面積は約 77,000 平方メートルであり、そのうち公園内に所在する洗足池の面積は約 41,000 平方メートルである。洗足池の平均水深は約 1.5 メートルであり、園内の中央部を南北に細長く占める形で位置している。したがって、洗足池は公園全体の面積の約 53% を占めていることになる。

洗足池は武蔵野台地の南端にあたる荏原台の谷地部をせき止めることで形成された淡水池であり、かつては灌漑用水として利用されていた経緯をもつ。池の周囲には崖線地形の名残をとどめた樹林地があり、公園の景観に変化を与えている。

洗足池駅周辺の標高は約 21 メートルと大田区内では比較的高い位置にあり、公園全体は緩やかな起伏に富んだ地形を特徴としている。園路は池の周囲を 1.2 キロメートルにわたり巡り、徒歩 20 分程度で一周できるよう整備されている。池の周囲には国の登録有形文化財(建造物)である妙福寺祖師堂(旧七面大明神堂)、池月橋、千束八幡神社、弁天島、水生植物園、桜広場、勝海舟夫妻の墓所、洗足池図書館などの施設や名所が配置されており、池を中心とした景観が構成されている。平成 31 年(2019)3 月、洗足池公園は大田区内初となる東京都指定の名勝となった。



図 2-4-3 洗足池公園(昭和 41 年(1966))



図 2-4-4 洗足池公園(現在)



図 2-4-5 妙福寺祖師堂(旧七面大明神堂)



図 2-4-6 勝海舟夫妻の墓所

(3)活動

①(公社)洗足風致協会等における活動

洗足池では、地域住民や各種団体による熱心な活動が見られる。その中心的な役割を担うのが、(公社)洗足風致協会(以下「洗足風致協会」という。)である。

『洗足風致協会事業概要(平成24年(2012))』や名望家10名から土地贈与を受けたことを記す書類(昭和8年(1933))によると、洗足風致協会は、昭和8年(1933)に創立して以来、洗足池の環境保護に努め、大田区とともに優れた景観を保全する大きな役割を果たしてきた。風致協会は昭和初期に都内各地で創立されたが、現在も活動を続けているのは洗足風致協会のみであり、90年以上にわたって地域の自然と景観を守り続ける住民の強い意思と愛着が今日まで息づいている。

洗足風致協会の活動は、洗足池公園及びその周辺において景観の保全と整備、施設運営、環境保全活動、伝統行事の開催など多岐にわたる。これらの長年にわたる取組には、近代化が加速する大都市において、ふるさとの原風景を守りたいという地域住民の強い思いや地域の歴史・自然を大切にする姿勢が表れている。

景観保全の代表的な取組として、昭和9年(1934)に洗足池公園内にある池の北側に造成した弁天島とその上に再建された弁天社がある。荒廃していた旧弁天社を移転した朱塗りの姿が現在では洗足池の象徴的な景観要素となっており、江戸時代から続く信仰の場としての空間を今に伝えている。平成18年度(2006)からの大田区との協定に基づく公園維持管理や環境整備からは、官民が一体となって地域資源を守る協働の精神が見られ、地域住民等による手入れが行

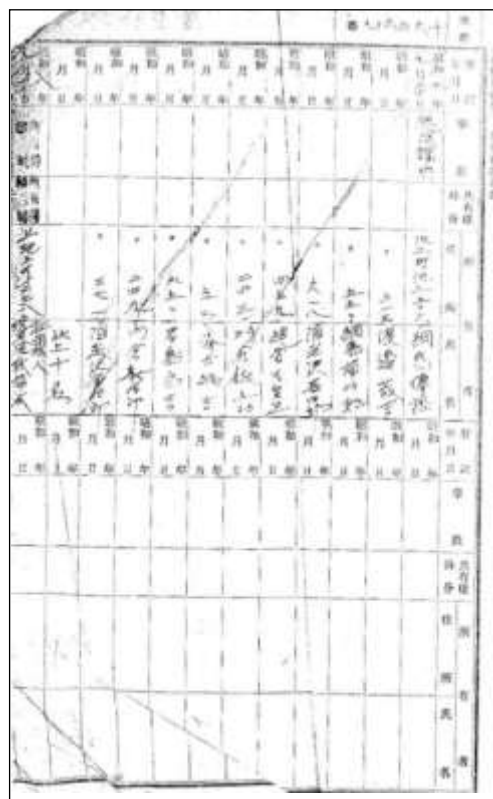


図 2-4-7 土地贈与を受けた書類
(昭和8年(1933))

[illegible]

図 2-4-8 洗足風致協会役員表
(昭和 10 年(1935)6 月末日現在)



図 2-4-9 弁天島(弁財天)

き届いた園内を歩けば、都会の喧騒を忘れさせる静謐な雰囲気を感じられる。

施設運営の面では、昭和 39 年(1964)より始まった「洗足池ボート場」の運営を通じて、池の真ん中から公園を 360° 一望できる特別な体験が提供されている。令和 5 年度(2023)には約 42,500 人もの人々がこの体験を楽しんでおり、陸地では得られない、水上からの視点により、洗足池の自然美と歴史的景観を体感している様子が見られる。



図 2-4-11 洗足池公園の資源



図 2-4-10 洗足池ボート(昭和 45 年(1970))



図 2-4-12 洗足池ボート(令和 7 年(2025))

環境保全活動の中核を担うのが平成 22 年(2010)より開始した「ほたる復活プロジェクト」である。このプロジェクトは昭和初期まで生息していたほたるを復活させようとする地域の思いを象徴している。特に、大森第六中学校、NP0、(株)東急電鉄、大田区等の関係者が、環境指標生物であるほたるの復活に向けて、世代や立場を超え、一体となって洗足池の水質改善や景観



図 2-4-13 ほたる復活プロジェクト

向上等に尽力する様子からは、都市部に残る水辺と緑豊かな自然環境を皆が大切に思い、そうした貴重な自然環境を後世まで引き継いでいこうとする熱意を感じられる。

伝統行事としては、平成 7 年(1995)から開催されている「春宵の響」では、5月の

満月に近い夜、洗足池公園内にある池月橋を舞台に横笛の澄んだ音色が静寂の中に響き渡る。横笛の音が水面に反射し幾重にも重なりあう様子は、まるで時が止まったかのような幽玄の世界を作り出している。また、平成15年(2003)から開催されている「洗足池ほたるの夕べ」では、初夏の闇に約3,000匹のほたるの淡い光が浮か



図2-4-14 春宵の響

び上がり、水面や木々の間を舞う幻想的な光景が広がる。その儚く美しい光の舞いを通して、かつての日本の夏の風情を現代に伝えようとする様が、洗足池に隣接して暮らす住民だけにとどまらず、長原駅や石川台駅、また北千束駅や大岡山駅付近に暮らす周辺地域の人々にも共感を呼び、当日は、広い地域から訪れる大勢の参加者に、自然の恵みと共にある暮らしの尊さを思い起こさせている。

これらの多岐にわたる活動を通じて、洗足風致協会による洗足池の景観保全活動の様子が見られ、新たな魅力の継続的な発信と洗足池の自然と歴史に親しむ機会を提供することで、地域への愛着を醸成し、都心にありながらも自然と文化が見事に調和した都会のオアシスとしての居心地の良さが体感できる。

また、平成31年(2019)3月、洗足池公園が大田区内初の東京都指定の名勝となったことを受けて、区は令和3年(2021)に「名勝洗足池公園保存活用計画」を策定した。そして翌年、この計画に基づいて、洗足池の景観を保全するため、行政、地域団体、専門家が連携する仕組みとして「名勝洗足池公園保存活用連絡協議会」(以下「協議会」という。)が組織された。

本協議会では、行政職員、洗足風致協会、地元町会、学識経験者等が一堂に会し、洗足池の保存活用に関する様々な課題について情報共有と意見交換が行われており、江戸時代から地域に愛され続けてきた洗足池公園を将来に引き継いでいこうとする熱意や、この地域の歴史的景観を守り育てようとする多様な関係者の強い結束が感じられる。

令和6年度(2024)までの実績として、公園内の樹木更新計画や公園西側増設地の整備計画について審議が行われ、桜の植え替えや園路整備などの具体的な成果が現れている。また、現在は、名勝公園マネジメント計画の策定に向けて議論が重ねられている。この計画では、行楽地として親しまれてきた洗足池の伝統的な景観体験を重視したシークエンス景観(移動しながら連続的に変化する景観)の整備等による景観保全・向上、植物等を活用した水質の改善、そして水量の確保等による景観保全・向上とい










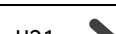
図2-4-15 名勝洗足池公園保存活用連絡協議会の様子

った多角的な視点から検討が進められている。

協議会では、学識経験者の進行のもと参加者同士の活発な対話が特徴的である。それぞれの立場から洗足池への思いを語り合う声が聞こえ、洗足池公園の歴史的価値や文化的意義についての認識を深める様子が見られる。これらの議論は室内だけでなく、協議会委員が共に洗足池公園を実際に歩きながら、池の水質や周辺の植栽状況などを確認し、現場で具体的な課題や魅力について意見を交わしている。

こうした取組を通じて、都心にありながらも水辺と緑が調和した洗足池周辺では、静けさや季節の移ろいを感じる風景に囲まれ、住民や訪れる人々に安らぎを与える市街地の良好な環境が見られる。

表 2-7-1 洗足風致協会の主な活動

主な活動名	活動時期				
	～昭和 20 年 (1945)	～昭和 40 年 (1965)	～昭和 60 年 (1985)	～平成 17 年 (2005)	～令和 7 年 (2025)
洗足風致協会設立	S8 				
景観保全と整備	S8 				
環境保全活動	S8 				
弁天島造成	S9●				
「洗足池ボート場」の運営※	●S2	S39 			
「ほたる復活プロジェクト」					H22 
「春宵の響」				H7 	
「洗足池ほたるのタベ」				H15 	
「名勝洗足池公園保存活用 連絡協議会」					H31 

※昭和 2 年(1927)：池上電鉄の洗足池駅開設とともに、池上電鉄によるボート場運営が開始。

昭和 39 年(1964)：「洗足池ボート場」の運営が、(公社)洗足風致協会に変更となる。

(4)まとめ

洗足池とその周辺地域は、高度に都市化した東京において、江戸時代から浮世絵に描かれてきた優れた自然景観と歴史文化資源が良好に保全された希少な地区である。日蓮の伝承に由来する池の名称、勝海舟夫妻の墓など、歴史的背景を色濃く残している。その歴史的・文化的価値は、平成31年(2019)に東京都の名勝に指定されたことや令和7年度(2025)に(公財)都市づくりパブリックデザインセンターが主催、国土交通省が後援した都市景観大賞の特別賞を受賞したことから、客観的に評価されていることが分かる。

洗足池周辺の景観は、豊かな自然環境と地域住民の日常生活、そして江戸時代から継承されてきた季節の行事や環境保全活動が相互に関連し合うことで形成されている。これらの要素が見事に調和することにより、都心にありながら四季折々の美しさを誇る特別な景観が創出され、東京都内でも稀有な歴史的風致となっている。

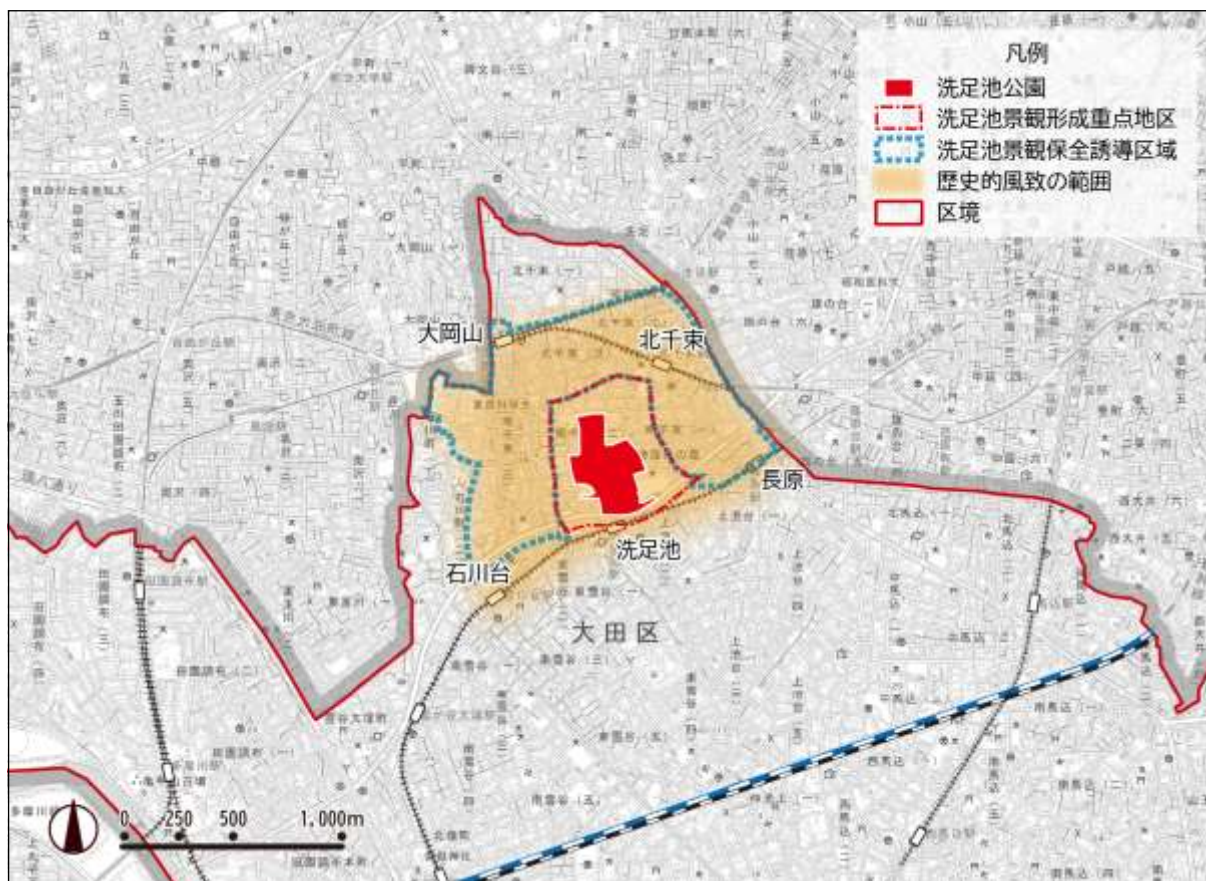


図 2-4-16 洗足池の景観保全にみる歴史的風致の範囲

2-5. 大森貝塚にみる歴史的風致

(1)はじめに

大森貝塚は、明治10年(1877)に米国の動物学者エドワード・S・モース博士によって発見された遺跡である。モース博士は腕足類(貝の一種)の収集研究を目的として来日し、同年(1877)6月19日に、明治5年(1872)に開通したばかりのわが国最初の鉄道で横浜から東京へ向かう途中、大森停車場(現:JR大森駅)付近の線路脇に貝殻の堆積を確認した。ハーバード大学在籍時に貝塚発掘の経験があったモース博士は、これを先史時代の貝塚と判断した。

発見から約3か月後の明治10年(1877)9月16日、東京大学で動物学を講じていたモース博士は学生2名と助手を伴って大森貝塚の発掘調査を実施した。この調査で土器片、骨片、土版などの遺物が採集され、その後も複数回の調査が行われた。これらの成果は、明治12年(1879)に学術報告書『Shell Mounds of Omori』として発表された。

この調査と報告書は日本人研究者や知識人に大きな影響を与え、日本における近代考古学研究の基礎となった。明治期の日本は西洋の科学技術や学術方法論を積極的に導入しており、モース博士による大森貝塚の発掘は、科学的手法に基づく考古学を日本に紹介した重要な出来事であった。

発掘以前の日本には「考古学」という学問概念は存在せず、古墳や出土品は「古器旧物」として扱われるにとどまっていた。モース博士の調査で導入された出土遺物の分類・分析方法や発掘調査報告書の刊行は、日本の考古学研究に大きな影響を与えた。

現在、大森は「日本考古学発祥の地」として認識されており、日本考古学の礎が築かれた場所として歴史的に重要な意義を持っている。世界的水準に発展した日本考古学の出発点がここにあったことは、この地の文化的・学術的価値をさらに高めている。



図2-5-1 エドワード・S・モース博士



図2-5-2 学術報告書『Shell Mounds of Omori』

(2)建造物

①大森貝塚¹【国指定の史跡】

大森貝塚は、大田区から品川区にまたがる台地上に位置する縄文時代後期から晩期(約4,000～3,000年前)の遺跡である。この貝塚からは、土器・石器・土版・骨角器等が出土しており、昭和30年(1955)に国指定の史跡となった。

この貝塚の特徴は、層状に堆積した厚い貝層にある。主にハイガイ、ハマグリ、アサリ、シオフキ、スガイなどの貝殻が主体となっており、層ごとに貝の種類や密度が異なることから、当時の人々の食生活や環境変化を読み取ることができる。

貝層には貝殻だけでなく、動物の骨、石器、土器片なども含まれており、縄文人の生活活動を具体的に示す貴重な証拠となっている。地形的には低地の干潟や入江に沿って形成されているのが特徴である。

現在までの発掘調査によって確認された範囲は約1,000平方メートルに及び、厚さ1メートル前後の貝層が観察されている。この規模と保存状態の良さに加え、わが国の考古学・人類学の発祥の地として、学史の上に貴重な価値を有するものであることから、大森貝塚の学術的価値は極めて高く評価されている。



図 2-5-3 大森貝塚(模型)

②大森貝塚碑

大森貝塚碑は、大正14年(1925)に逝去したモース博士の訃報を聞きつけた石川千代松、岩川友太郎、臼井米二郎、佐々木忠次郎、松村瞭、宮岡恒次郎ら、21名が発起人となり、大森貝塚の顕彰とモース博士の偉大なる功績を後世に伝えるため、昭和5年(1930)に現在の大田区山王1丁目3番に建てられた記念碑である。

記念碑は仙台石を用いて製作され、高さ約1.8メートル、幅約0.9メートルの石碑に2段構造の台石を設置している。碑面の表側には碑名、英文による説明文及び発起人名が刻銘され、裏側にはモース博士による貝塚発見の経緯と碑が昭和5年(1930)4月に建てられたことが記されている。



図 2-5-4 大森貝塚碑
(建立当時(昭和5年(1930)))



図 2-5-5 大森貝塚碑(現在)

¹ 貝塚とは、食料や貝類の殻を捨て、それが堆積した遺跡。古くは「貝墟」または「介墟」とも書いた。

(3)活動

①東京都大森貝塚保存会の活動

東京都大森貝塚保存会(以下「保存会」という。)は、昭和40年(1965)に地元有志を中心に設立された。発足時の『趣意書(昭和40年(1965)11月27日)』には、次代を背負う夢多き少年少女に保存会の活動を知ってもらいたいという目的が明記されている。保存会は設立から間もない昭和42年(1967)に、大森貝塚に関する、当時入手困難であった調査報告書や論文を収録した『大森貝塚-90周年記念-』を出版するという成果をあげた。

昭和52年(1977)の大森貝塚発掘100周年に向けては、初代会長の西岡秀雄と第2代会長の関俊彦が中心となり、社団法人大森倶楽部の協力を得て積極的な活動を展開した。彼らは周辺の小学校や東京大森ライオンズクラブ、東京大森ロータリークラブでモース博士や大森貝塚に関する講演を精力的に行った。この啓発活動は、後に100周年記念事業における児童による絵画展に結実し、会場には多くの人々が訪れ、大森貝塚の歴史と文化を共に実感する姿が見られた。また、大森駅ホームの記念碑建立資金支援という形でも実を結ぶこととなった。

同じく100周年の節目に、保存会は「大森貝塚壙碑」の見学環境整備にも尽力した。それまで私邸内にあって一般の人々が見学できなかった碑について、日本電信電話公社(現:NTTデータ、以下「電電公社」という。)が隣接地に新社屋を建設する機会を捉え、国・都・区に協力を要請した。電電公社の厚意により、現在の見学通路が整備され、大森貝塚壙碑を見に行くため見学通路に進む人が時々見られる。

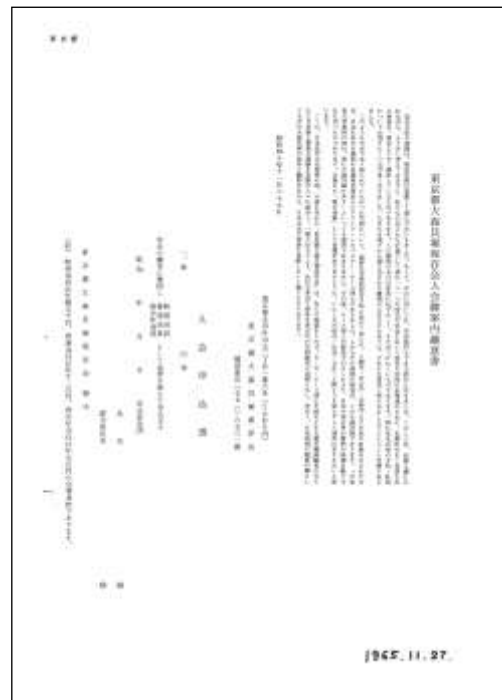


図2-5-6 大森貝塚保存会発足時の『趣意書』



図2-5-7 大森貝塚100周年パレード



図2-5-8 花自動車パレード

さらに保存会は、京成百貨店(現：大森駅前ビル)において、縄文生活を再現した「モース博士と大森貝塚展」を開催するとともに、大田区・品川区の小中学生による「縄文時代をテーマにした図画コンクール」を企画した。地域を巻き込んだ取組として、大田区立山王小学校の鼓笛隊や地元のボーイスカウト・ガールスカウト、交通少年団、東京消防庁音楽隊、地元企業等による花自動車パレードも実施され、多くの市民に大森貝塚の価値を知ってもらう機会となった。これらの活動は『大森貝塚-100 周年記念-(昭和 55 年(1980) 3 月 20 日)』としてまとめられ、その後の小学館によるモース関連書籍の刊行にも影響を与えた。

現在、保存会は毎年 9 月中旬に「日本考古学発祥の地」(大森駅構内)、「大森貝塚の碑」、「大森貝塚」(品川区)の 3 つの記念碑への献花式典を開催している。この式典には多くの人々が参加し、モース博士への敬意とこの土地の歴史を重んじる人々の姿が見られる。これらの記念碑はいずれも、大森貝塚の歴史的価値を後世に伝える重要なモニュメントとなっている。また、保存会は定期的に講演会やパネル展を開催するとともに、大森貝塚に関する書籍や絵葉書、小冊子の刊行も続けている。保存会の活動は地元の関係団体との連携のもと、文化・歴史に満ちた地域環境の整備や提言にも及んでおり、地域の文化遺産保護における模範的な取り組みとして評価されている。

大森駅を降り立つと、周辺の街並みからは想像できない太古の時代の記憶が、記念碑や案内板を通して浮かび上がる。現在の大森は市街地として発展しているが、貝塚の存在によって、縄文時代にこの地域が東京湾に近接し、海の恵みを生活の糧としていた人々の暮らしがあったことを伝える歴史的景観が感じられる。特に大森駅構内に設置された「日本考古学発祥の地」の碑は、通勤・通学の人々が行き交う日常空間に歴史的な奥行きを与え、地域の名称「大森」と貝塚の関係を静かに語りかける存在感がある。都市化によって失われがちな土地の記憶が、駅という公共空間の中に巧みに埋め込まれることで、地域の独自性を保つ景観要素となっている様子が見られる。また、周辺の商店街や住宅地からわずかに離れた場所に保存されている貝塚跡は、喧騒から一步離れた歴史的空間として、現代の街並みの中に古代からの歴史を感じられる場となっている。

大森貝塚の存在によって、大森という地域は単なる東京の住宅地・商業地ではなく、縄文時代から現代まで連なる時間の流れを内包した独特の風情を醸し出している景観が感じられる。



図 2-5-9 「日本考古学発祥の地」の碑
(昭和 52 年(1977)撮影)

表 2-5-1 東京都大森貝塚保存会の主な活動

主な活動名	活動時期				
	～昭和 20 年 (1945)	～昭和 40 年 (1965)	～昭和 60 年 (1985)	～平成 17 年 (2005)	～令和 7 年 (2025)
大森貝墟碑の設置	S5●				
東京都大森貝塚保存会の発足		S40●			
90 周年記念事業(準備期間含)		S40	➡ S42		
大森貝塚に関する講演		S40	➡		
100 周年記念事業(準備期間含) (記念誌絵画、パレード等)		S42	➡ S52		
記念碑に対する献花式典		S40	➡		
友誼団体との交流 モース研究会			S52	➡	

(4)まとめ

大森貝塚という国指定の史跡である縄文時代の遺跡と、その学術的・歴史的価値を守り伝える東京都大森貝塚保存会の活動が一体となり、都市部に残る縄文時代の文化遺産として景観を形成し、地域の人々と遺跡の共存により育まれてきたこの地域特有の歴史的風致となっている。



図 2-5-10 大森貝塚にみる歴史的風致の範囲

2-6. 海苔のふるさとにみる歴史的風致

(1)はじめに

かつて大田区は海苔の産地として名高く、味・量ともに全国一を誇っており、江戸時代から長きにわたり人々の暮らしと地域経済を支えてきた。漁業権の放棄により昭和38年(1963)春に海苔養殖の歴史は幕を閉じたものの、現在でも区内には多くの海苔問屋が残り、海苔の流通の拠点となっているほか、長年の経験と鑑識眼を備えた問屋が選び抜いた海苔が全国に販売され、大勢の人々の食卓を彩っている。

①区における海苔の歴史

区における海苔の歴史の始まりは、今から300年以上前の江戸時代に遡る。当初、海辺の農村の冬の副業として開始された海苔の養殖は、効率的な農閑余業としての価値を高めていった。延享3年(1746)には海苔の運上永(営業税)が賦課されていた記録があることから、享保年間(1716-1735)には海苔の養殖業が確立していたと考えられている。江戸時代に海苔養殖を行えたのは幕府が認めた地域のみであり、東京内湾では大森から品川にかけての沿岸部だけであった。海苔の生育には、適度な潮の干満、遠浅で波静かな海面、栄養分を多量に含む汽水域が最適であるといわれるが、大森・品川の沿岸はこれらの条件を満たしており、「御膳海苔」として将軍家や徳川御三家に献上されるほど品質の良い海苔が採れた。

海苔の養殖は「ヒビ」と呼ばれる鹿朶木を浅瀬に建てて、海水に浮遊している海苔の胞子をそこに付着させ、葉状に成長したものから採取を行う。かつては海辺に漂う海苔を「藻取り」する方法が主流であったが、養殖の方法が確立されたことで確実に大量に海苔を採取することができるようになった。これにより大森・品川の沿岸は海苔の一大産地となった。明治から昭和初期には最盛期を迎え、『海苔の歴史(昭和



図 2-6-1 江戸時代の海苔養殖風景
「名所江戸百景 南品川鮫洲海岸」
(歌川広重)(安政4年(1857))

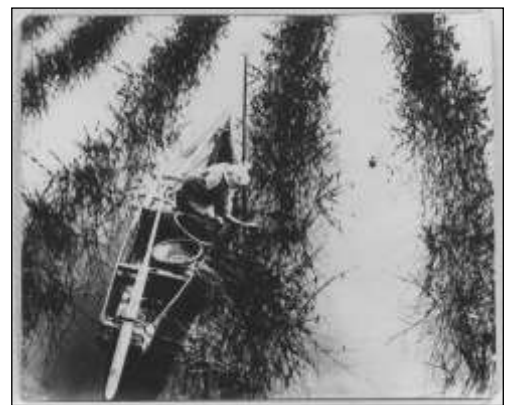


図 2-6-2 タケヒビからの海苔取り
(昭和15年(1940))

45 年(1970)』によると、昭和 24 年(1949)の大森村(現：大森地域沿岸部周辺)における採藻人数は 3,700 人を超えたが、東京都沿岸部の埋め立て計画などに応じるため、昭和 37 年(1962)に漁業権の放棄が決定し、昭和 38 年(1963)春に大田区における海苔養殖はその歴史に幕を閉じた。

海苔養殖の終業により役目を終えた海苔生産の用具は処分が始まり、歴史ある海苔生産用具は消滅の危機に瀕した。そこで大森の有志は、地域を支えた海苔養殖の歴史を後世に伝えることを目的に、昭和 39 年(1964)に「大森海苔漁業資材保存会」を立ち上げ、生産用具の収集を進めた。同保存会は集まった資料の保存・展示を行う施設の設立を求め、区はこれに応じて昭和 42 年(1967)に当時大森にあった大田教育センター内に「郷土資料室」(大田区立郷土博物館の前身)を開設し、海苔の生産関係資料を中心に展示を行った。これらの海苔生産用具一式は、平成 5 年(1993)に重要有形民俗文化財「大森及び周辺地域の海苔生産用具」に指定され、平成 11 年(1999)に海苔船が 2 点追加された。また、区は平成 20 年(2008)に「大森 海苔のふるさと館」を平和の森公園内に開設し、重要有形民俗文化財を含む約 150 点を常設展示している。



図 2-6-3 海苔生産用具(ヒビ・竹割り・鋤等)

②大森本場乾海苔問屋協同組合の結成

大森本場乾海苔問屋協同組合は、海苔の流通を担う乾海苔問屋の集まりである。組合の基礎となったのは、明治 18 年(1885)頃に大森村の卸売や仲買をする乾海苔営業者で組織された「本場乾海苔商組合」であり、粗製濫造品に注意することや販売する海苔の規格を統一することを目的とした。

明治 19 年(1886)には、「本場乾海苔商組合」を継承した「大森本場乾海苔商組合」が結成され、昭和 22 年(1947)に品川・糀谷・羽田の各海苔問屋と合同して「大森本場乾海苔問屋組合」に改組し、昭和 27 年(1952)の協同組合法により現在の「大森本場乾海苔問屋協同組合」となった。組合の名称に「本場」を用いることができるのは大森のみであり、これは明治期に東京府から許可を受けたものである。

昭和 38 年(1963)春の海苔養殖終業により、東京都の沿岸部で生産された海苔を買い付けられなくなった大手の海苔問屋は自ら全国の生産地に出向くことがあったが、小口の買い付けを行う小規模問屋はこの対応が困難であった。そこで、大森本場乾海苔問屋協同組合は入札場と事務所を備えた「大森海苔会館」を建設した。これにより、組合に加盟する小規模問屋は海苔の買い付けを継続することができるようになったことで、海苔の養殖が終業した現在でも大田区は海苔の流通の中心となり、全国各地に向けて販売・取引を行っている。

(2) 建造物

① 大森海苔会館

昭和 37 年(1962)10 月に建設された、大森本場乾海苔問屋協同組合の事務所と海苔の入札場を備えた会館である。

建設当初は、鉄筋コンクリート造の 3 階建てであったが、昭和 48 年(1973) 6 月に 4 階建てに増築された。1 階は事務所及び入札場、2 階は会議室等、3 階・4 階は倉庫となっている。



図 2-6-4 大森海苔会館
(昭和 37 年(1962)10 月))

表 2-6-1 大森海苔組合加盟店 (大田区内のみ)

空欄：一般店舗 ①：通信販売店舗 ②：業務用店舗(一般客購入不可)		所在地	空欄：一般店舗 ①：通信販売店舗 ②：業務用店舗(一般客購入不可)		所在地
加盟店 (大田区内のみ掲載)			加盟店 (大田区内のみ掲載)		
㈱朝倉海苔店		東馬込	㈱原海苔店		大森中
岩波海苔店		大森東	海苔の松尾		大森東
㈱上原海苔店		上池台	㈲まるりょう伊藤海苔店		大森中
㈲大橋新蔵商店		大森東	㈱守半海苔店		大森北
㈲大橋昌治商店		西糀谷	㈱守半本店※ ²	①	大森北
大森水産㈱		大森東	㈱茂利半	②	大森北
㈱金子海苔店		大森東	㈱東京蒲田守半		西蒲田
㈱川島屋	①	大森本町	㈱守矢武夫商店		大森東
㈱久保井海苔店		大森東	矢澤海苔㈱		大森西
㈱小林海苔店		多摩川	㈱横山安五郎商店		羽田
㈱五味商店	①	大森本町	㈱吉田商店		大森南
㈲ヤマサ島田商店	①	大森南	米忠海苔店		池上
㈲下金海苔店		大森東	㈱藤森商店		大森中
㈱立石商店		大森中	㈱日達海苔店		西馬込
㈱並木海苔店		大森西	㈱丸由海苔店		大森東
㈱濱富海苔		大森北	㈲丸治海苔店		仲池上
㈱濱貴商事		大森中	㈱イトウネン		大森北
濱口海苔店		大森中	進藤海苔店		山王

※1：建築年、創業年は、大森海苔組合調べ。

※2：㈱守半海苔店の取次店として営業している。

(3)活動

①海苔の入札会

大森本場乾海苔問屋協同組合の入札の仕方は極めて特徴的である。一般的には地域ごとの漁業協同組合連合会の検査員が海苔の品質を見立てて等級をつけたあとに問屋の入札が行われるが、大森本場乾海苔問屋協同組合の場合は等級検査を行わず、試食による「味利き」と、海苔の光沢や色、香りから品質を判断する「目利き」の力で値段がつけられ、競り落とされる。このため、問屋の海苔を見る実力が試される「日本一難しい入札会」といわれている。

また、入札にあたっては、問屋が紙に入札単価を記入して買い付けたい海苔の箱に入れ、同組合の理事らによる開票で落札者が決定する。この方法は戦前から採用されており、現在に至るまで変わらずこの入札が行われている。

入札会は毎年 12 月から翌年 3～4 月までの間に毎週 1 回行われ、入札会の前日には会館の前にトラックが次々と到着し、各地で生産された山積み的大海苔が入札場に運び込まれる様子が見られる。会館付近には入札に参加する海苔問屋関係者の車が並び、その活気を感じられる。



図 2-6-5 入札会の様子
(昭和 44 年(1969) 2 月)

②海苔の販売

海苔の養殖が終業してから 60 年以上経つ現在でも、大森周辺を中心に数多くの海苔問屋が営業している。特に 11 月末頃から 12 月に採取・製造された「新海苔」が販売される時期には、多くの店舗に「新海苔入荷」の張り紙が掲示され、冬の訪れとともに海苔の旬の始まりを知ることができる。大森本場乾海苔問屋協同組合に加盟する大田区内の店舗は 50 年以上海苔の販売を続けており、歴代の店主によって厳選された一級品の海苔が、大森地域のみならず全国の食卓を彩っている。

海苔問屋によって扱う海苔の風味が少しずつ異なり、地域住民はそれぞれの好みに合う海苔を求めて店を訪れる姿から、暮らしに根付いた食の伝統と、店と地域住民のつながりを感じる



図 2-6-6 店先に張り出される「新海苔入荷」の張り紙



図 2-6-7 海苔の松尾(店舗)(昭和初期)

ことができる。

(4)まとめ

かつて大森周辺で盛んに行われていた海苔の養殖は移り行く時代の中でその姿を消したものの、海苔の流通・販売は受け継がれている。熟練した問屋により守られた品質と味わいは、区内にとどまらず全国に届けられ、各地の人々の食事に香りとうまみを加えている。海苔のシーズン中に見られるトラックの往来や、数多く残る海苔問屋に掲げられる新海苔入荷の知らせが、今もなお海苔の流通拠点としてその名が知られる地域の歴史的風致を形作っている。

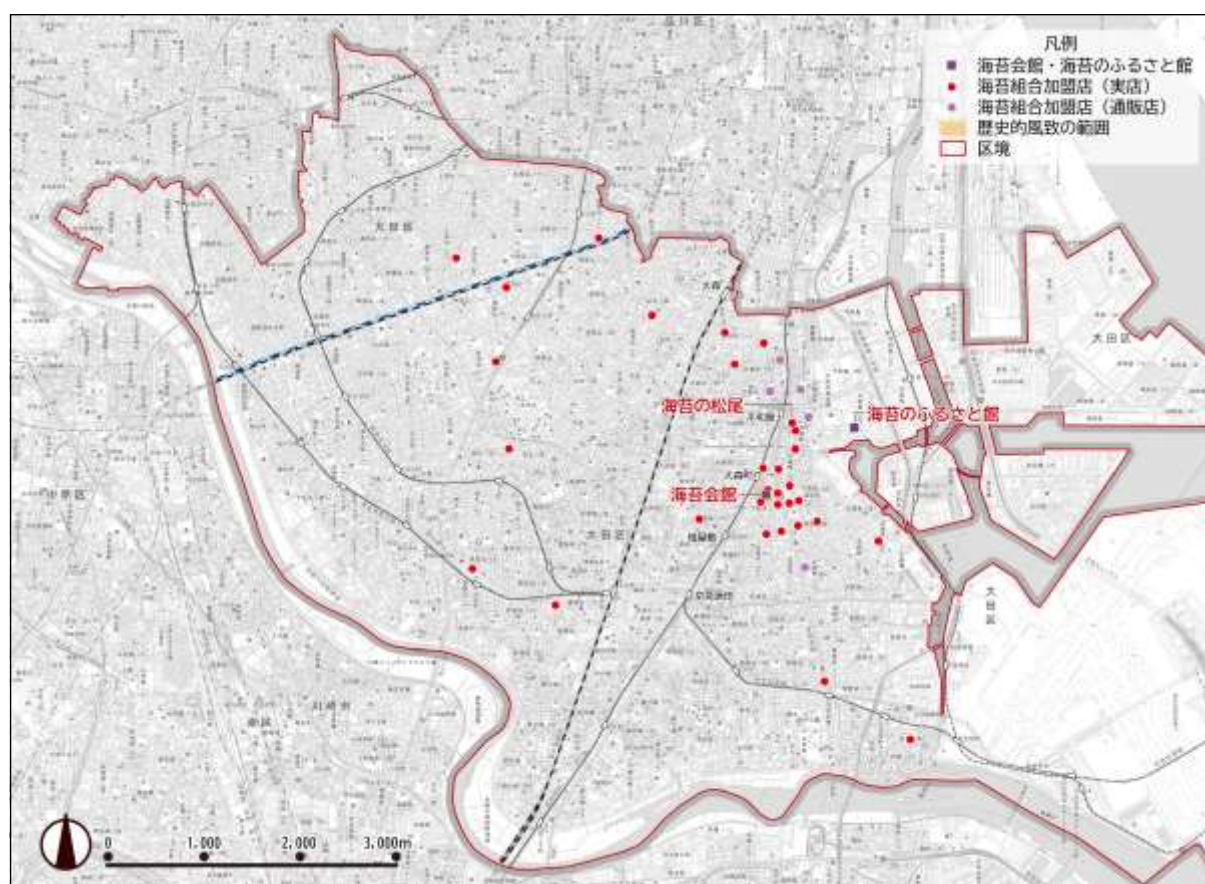


図 2-6-8 海苔のふるさとにみる歴史的風致の範囲



コラム

大森本場乾海苔問屋協同組合の取組

大森本場乾海苔問屋協同組合は、現在、海苔の入札等のほかに、海苔の普及活動等を行っている。

海苔の日である2月6日前後に、区内の小中学校に焼海苔を提供したり、海苔の歴史を紹介した冊子を配布したりしている。また、海苔摘み体験や海苔問屋による直売会を実施するなど、大田区の誇りであった海苔養殖の歴史・文化を次世代に継承する取組を行っている。

調整中

図 2-6-9 海苔の歴史を紹介した冊子

調整中

図 2-6-10 海苔摘み体験

調整中

図 2-6-11 海苔問屋での直売会

2-7. 馬込文士村にみる歴史的風致

(1)はじめに

大正末期から昭和初期にかけて、馬込・山王・中央周辺の地域(大森駅西側)一帯では、尾崎士郎、宇野千代、萩原朔太郎、室生犀星、山本有三、川端康成などの作家や、川端龍子、小林古径、川瀬巴水、熊谷恒子などの芸術家が文芸活動の拠点として暮らし、のちに「馬込文士村」として知られる文化的な地域コミュニティが形成され、地域に独自の知的・文化的風土をもたらした。現在でも、日本画の巨匠として知られる川端龍子の旧宅と画室が龍子公園内に現存しているほか、川端龍子が自身の代表作を展示・公開するために自ら設計した龍子記念館、尾崎士郎の旧宅を復元した尾崎士郎記念館、熊谷恒子の自宅を改装して開館した熊谷恒子記念館などから、文士たちのかつての暮らしぶりをうかがうことができる。

馬込文士村の存在は地域住民の郷土への親しみを増す一端を担っており、なかでもかつて区内中学校の教師を務めていた野村裕による文士村の探訪は、のちにレリーフや案内板の設置、散策マップの作成につながり、現在でも地域の個性を形作る重要な要素となっている。

①馬込文士村成立の背景

馬込文士村成立の背景には、大正初めに大森在住の芸術家グループが結成され、山王に開業した望翠楼ホテルを会場に「木原会」と称する展覧会を開催するなど芸術的環境が整いつつあったことや、大正12年(1923)に発生した関東大震災による東京市内の被災や混乱をきっかけに、被害が少なかった大田区内に多くの人々が市内から移住してきたことなどが挙げられる。当時のこの地域は地価が比較的安く、緑豊かで静かな環境であったことから、若い作家・芸術家たちにとって創作に適した地域であったことがうかがえる。

特に多くの作家・芸術家たちがこの地域に住むようになったのは、新進作家であった尾崎士郎が、文学上の先輩であった劇作家・上泉秀信の勧めにより馬込の農家の納屋を買い宇野千代との新婚生活のために転入したことを契機とする。自身も文士村に移住した榊山潤の『馬込文士村』に、尾崎士郎が「一杯やると誰彼の差別なく」馬込へ移住するよう勧誘したとあるように、尾崎はこの地域を気に入り、次々に仲間を誘い、多くの文士たちがこの地へ移住した。尾崎は馬込・山王周辺で転居をし、その後品川区、静岡県伊東市へ移り住んだが、

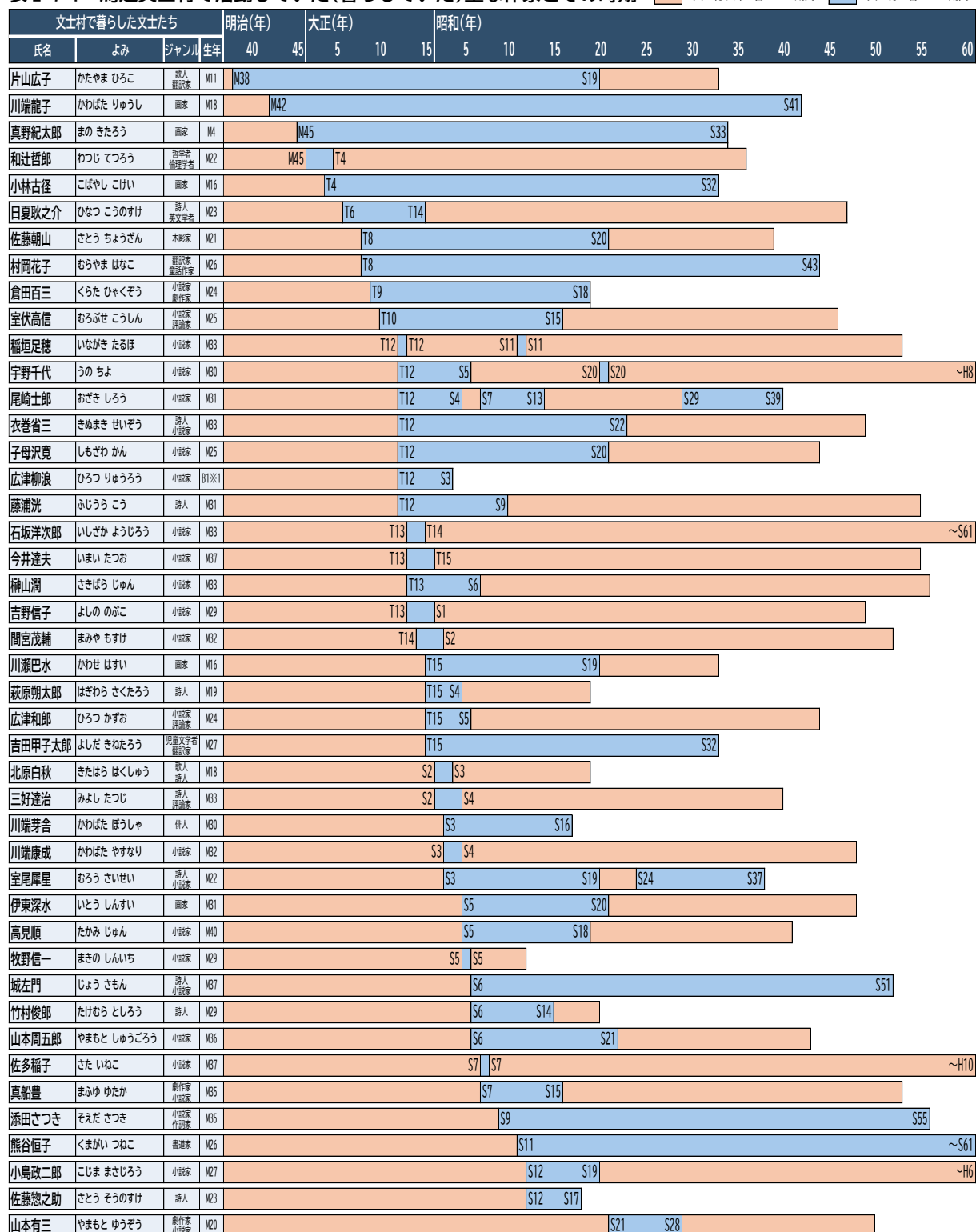


図 2-7-1 馬込文士村の風景
(昭和 47 年(1972))

昭和 29 年(1954)に再び山王に居を定め、昭和 39 年(1964)に亡くなるまでここで過ごした。この旧居は平成 20 年(2008)に改修、尾崎士郎記念館として整備され、複製の原稿や愛用品が展示されている。

また、同じく馬込文士村に住んだ詩人・小説家である室生犀星の旧宅に建てられた離れが、地域の要望で馬込第三小学校内に移築されている。

表 2-7-1 馬込文士村で活動していた(暮らしていた)主な作家とその時期 ■ : 文士村以外で暮らした期間 ■ : 文士村で暮らした期間



※1 : 「B1」は文久元年。
※短期間の居住(移動等)は除いている。

(2) 建造物

①旧川端龍子邸【国登録有形文化財(建造物)】

日本画家・川端龍子が自ら設計した旧宅と画室は龍子公園内に当時のまま保存されており、令和6年(2024)3月に国登録有形文化財(建造物)となった。

敷地中央に主屋及び中門、仏間棟、持仏堂が東西に並び、その北側に画室が配置されている。

主屋は平屋建、切妻造、棧瓦葺であり、その東に延びる中門は、切妻造、棧瓦葺である。主屋の外壁の腰壁は竹の木賊張り、主要室の内壁は大壁として天井周辺まで塗廻すなど、川端龍子の嗜好が反映されている。

仏間棟は主屋の西に接続する平屋建一部2階建の棧瓦葺。1階は仏間の北東に控えの間が配置されており、2階は寝室が1室配されている。仏間棟の西には、コンクリートブロック造の切妻造、妻入、棧瓦葺の持仏堂がある。持仏堂の内部は1室で、西に祭壇、北と南の各1か所に尖頭アーチ窓が開けられ、上部は尖頭のヴォールト天井となっているなど、西洋風とも思える凝った意匠となっている。

敷地の北東に位置する画室は平屋建、切妻造、銅板葺で、南西には土庇が設けられている。天井は高さ4メートル、内部は60畳もの広さがある板敷の1室で、外周は大判ガラスの引戸が用いられ、開放的な画室となっている。高床になっており、床下や壁、軒裏などに竹が使用されているのが特徴である。

②龍子記念館【国登録有形文化財(建造物)】

川端龍子の文化勲章受章と喜寿を記念し、自身の作品を後世に残して多くの人に鑑賞してもらうために昭和38年(1963)に建設された記念館である。龍子自身が設計を行っており、令和6年(2024)3月に国登録有形文化財(建造物)となった。



図 2-7-2 旧川端龍子邸(主屋)の外観



図 2-7-3 持仏堂



図 2-7-4 画室



図 2-7-5 龍子記念館

2階建で、1階は床を高くしたピロティ構造、2階は展示室となっている。豪快な性格であったといわれる龍子は、作品を楽しんでもらえるなら、光で絵が多少傷んでもまた書けばいい、という考えのもと、2階部分は大きな窓が並び、当時は自然光で作品を鑑賞できる構造であった。現在は、作品を傷めないように窓をふさぐなど厳重な保護を行っている。

川端龍子の本名である「昇太郎」や、雅号の「龍子」から連想される「龍」や「昇り龍」にちなんで、記念館は随所に龍をイメージさせる意匠が配されている。屋根の上には龍舌蘭の彫刻が飾られ、アトリエに続く石畳はウロコ状となっており、記念館自体も上から見るとタツノオトシゴの形をしている。

(3)活動

①馬込文士村を支える人たち

現在では全国的に知られている馬込文士村であるが、当初から広く認知されていたわけではない。その存在や魅力が広まるきっかけとなったのは、当時区立中学校の教師であり、馬込で長く暮らした野村裕が馬込文士村の探訪を始めたことにある。

平成3年(1991)6月11日に産経新聞の東京みなみ版に掲載された野村に関する記事や、野村の著書『馬込文士村の作家たち(昭和59年(1984))』によると、昭和23年(1948)、「馬込の文士」をテーマとした展示を生徒とともに行ったのを機に、馬込文士村について多くの人に知ってもらい、より一層郷土愛を持ってもらいたいという思いから、かつてこの地域に住んだ尾崎士郎や宇野千代などの文士たちが住んでいた住所を調べ、そこを訪れて旧居を確認したり、近隣に住む文士にゆかりのある人物に聞き込みを行ったりするなどして、生い立ちや馬込文士村に住んでいたころの様子を書き記す活動を始めた。この探訪は、教師として多忙な業務の合間を縫って行われたもので、30年近くの時間を要した地道な作業であったが、開発などによって街が日々姿を変えるなか、かつての馬込が消える前に資料として残したい、という野村の強い意志のもと取り組まれた。

昭和50年(1975)に、野村が校長を務めていた大田区立馬込東中学校の文化祭においてPTAコーナーで探訪結果を展示し、これを見たローカル新聞の発行者が記事に取り上げたことや、NHKのラジオで放送されたことを契機に、地域住民のまなざしが馬込文士村に向けられるようになり、馬込文士村周辺を訪れる人の姿が見られるようになった。

昭和58年(1983)には、探訪の集大成ともいえる「馬込文士村を語る」と称した講演を行い、大田区立馬込図書館で発行していた『ねんじんだより』に、野村がそれまで取り続けた写真とともに全文が掲載された。この講演をきっかけに、馬込文士村に

関する勉強会の実施について提案があり、野村を中心とした「牛迫村歴史と文芸の会」というサークルも結成されるなど、「馬込文士村」の歴史が地域住民や文士たちに関心を持つ人々に広まっていった。同会では、文士たちやその作品に関する学習会や見学会等を実施し、野村の逝去後も「馬込村文芸の会」と名前を変えて平成16年(2004)ごろまで活動を行った。

野村による講演は複数回行われ、昭和58年(1983)には9月から12月にかけて12回にも及ぶ講座が開催されたほか、様々な新聞に記事が掲載された。また、昭和59年(1984)には、探訪の結果や文士たちの作品の概要をまとめた『馬込文士村の作家たち』を自費出版するなど、馬込文士村の知名度向上に大きく寄与した。

こうした活動によって馬込文士村の存在は徐々に多くの人に知られるようになり、平成元年(1989)にはJR大森駅西口に「馬込文士村案内」という大きな案内板を区が設置した。ここには馬込文士村の概要が記載されているほか、かつてこの地域に住んだ文士たちの住居があった場所が地図に記されており、現在では都営浅草線西馬込駅、大田文化の森、山王草堂記念館、大田区立郷土博物館にも同様の案内板が設置されている。案内板は1枚でも読みごたえがあり、訪れた人が案内板の前に足をとどめ、文字に目を凝らす姿が見られる。また、駅のほど近くにある天祖神社の階段脇にはレリーフが設置されており、43人の文士の顔や、馬込文士村内で行われていたというダンスパーティーの様子、流行したモダンガールの特徴を示したものなど、当時の華やかさを感じることができる。



図2-7-6 大森駅西口の「馬込文士村案内」



図2-7-7 天祖神社の階段脇のレリーフ

平成3年(1991)には産経新聞で馬込文士村をテーマとした連載が行われ、尾崎士郎や宇野千代などの文士や、画家である川端龍子や彫刻家の佐藤朝山などの芸術家の親族やゆかりのある人物が当時を振り返った記事が掲載されるなど、全国の人々が馬込文士村へ注目するようになったことがうかがえる。

また、馬込文士村を散策する人々の手助けとなるよう、大田区馬込特別出張所や大田区立郷土博物館が案内マップを発行している。馬込文士村を巡ることができる散策ルートが用意されており、マップを片手にルートを辿る人々の姿から、往時の雰囲気を感じ取れる。

さらに、馬込文士村の歴史や魅力を観光客に伝えるため、大田区立郷土博物館が主催した講習の受講者によって構成された「馬込文士村ガイドの会」が案内役となる馬込文士村周辺のガイドツアーが平成 17 年(2005)から行われ、ガイドの説明を熱心に聞きながら散策する人々の姿を見ることができ、街に刻まれた文士たちの物語を辿り、思いを馳せる様子が見られる。

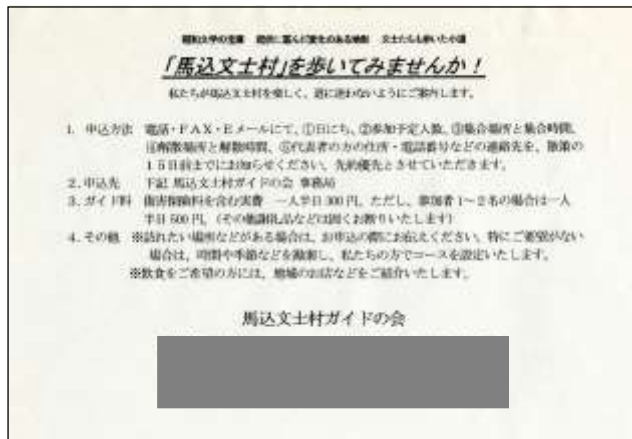


図 2-7-8 馬込文士村ガイドの会パンフレット
(平成 17 年(2005))
※個人情報部分を非表示にしています。



図 2-7-9 ガイドツアーのパンフレット

馬込文士村エリアにある和菓子屋では、文士たちも創作活動のひと時に食したであろう和菓子をイメージし、「文士村」を冠した和菓子が昭和 24 年(1949)頃から販売されるなど、地域住民も一体となった歴史・文化の継承活動が行われ、日常に馬込文士村の歴史が溶け込んでいることがわかる。



図 2-7-10 「文士村」を冠した和菓子

表 2-7-2 馬込文士村での主な活動

主な活動名	活動時期				
	～昭和 20 年 (1945)	～昭和 40 年 (1965)	～昭和 60 年 (1985)	～平成 17 年 (2005)	～令和 7 年 (2025)
野村裕 馬込文士村の探索開始	S23	→ S50 頃			
野村先生が校長を務める中 学校で上記探索結果の展示			S50●		
馬込青年館で「馬込文士村 講座」を開催			S58●		
野村先生が「馬込文士村の 作家たち」を自費出版			S59●		
レリーフ設置				●H2	
案内板、文士の解説板設置				H1→H4	
牛追村歴史と文芸の会 (S61 に「馬込文芸の会」に改称)			S59	→	H16
馬込文士村ガイドツアー (馬込文士村ガイドの会)				H17	→
「文士村」を冠した和菓子の 販売		S24	→		

(4)まとめ

馬込文士村は、個人の探訪・調査活動を契機として、地域住民のみならず全国に知られる文化的な地域となった。作家・芸術家たちに関心を持つ人々が来訪して歴史の痕跡をたどり、かつての生活の様子や文士たちの作品に思いを馳せる姿に、この地の歴史が現在も息づいていることがうかがえる。戦災や周辺の開発により作家・芸術家たちの旧居はほとんどが取り壊され、当時の面影は薄れてしまっている。しかし、旧川端龍子邸をはじめとした残存する旧居や記念館等の建造物と、独自のアイデンティティを守ろうとする地域の人々の継承活動等により、その文化的価値は今もなお大切に受け継がれている。

このように、馬込文士村における歴史的風致は、作家・芸術家たちの旧居等の物的遺産、現在も続く地域住民による歴史・文化継承活動が一体となって構成されており、大正から昭和初期にかけての文化人の暮らしを感じさせる風情を今に伝えている。

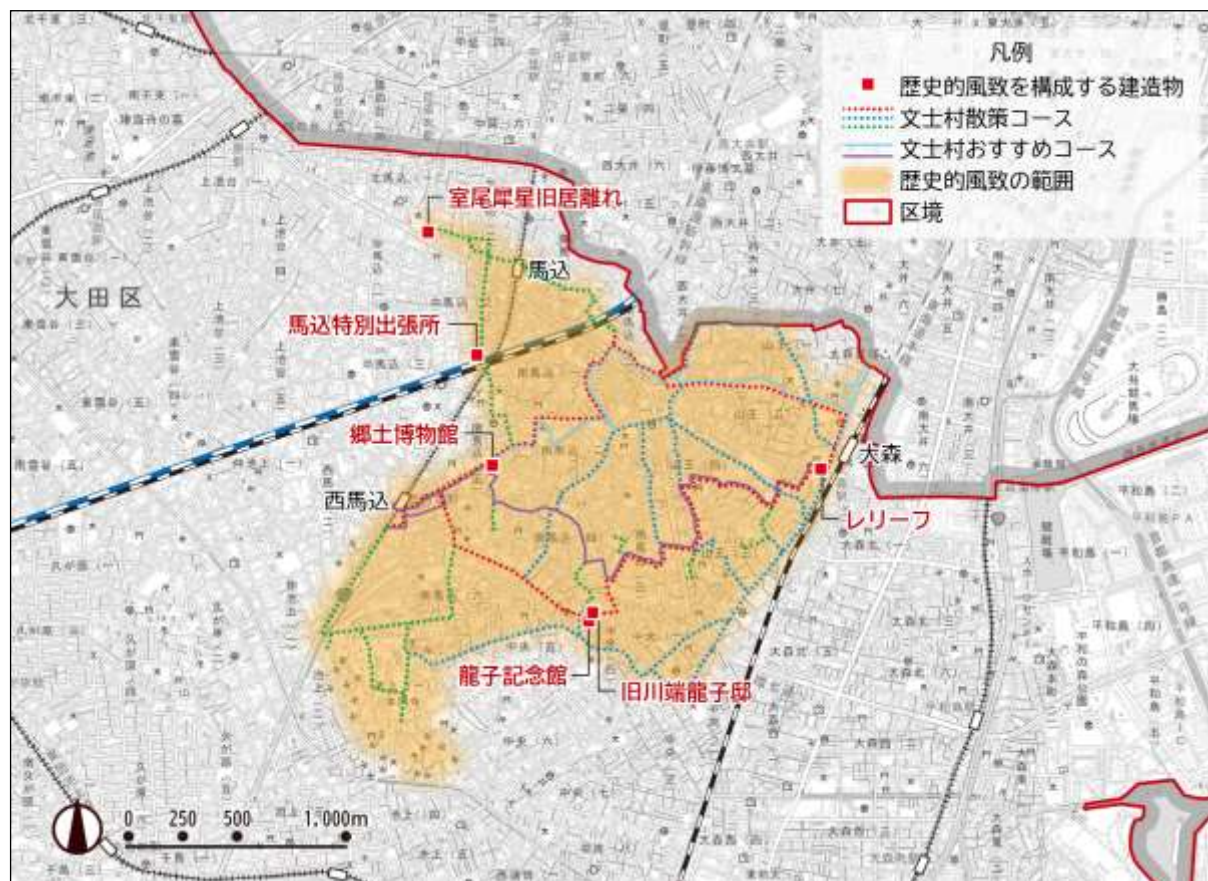


図 2-7-11 馬込文士村にみる歴史的風致の範



コラム

宇野千代

宇野千代は、山口県岩国の裕福な家に生まれ、継母と深い絆を築き、その温かさと面倒見の良さは自身の家庭環境や感情をもとに書いたとされる小説『おはん』にも反映された。

大正10年(1921)に短編『脂粉の顔』で文壇デビューし、恋愛や交流を通じて、詩人萩原朔太郎や小説家川端康成など文化人との多彩な人脈を築いた。モダンガールの先駆けとして断髪や流行に敏感で、馬込文士村での社交も盛んだった。代表作には、『おはん』のほかに『色ざんげ』『生きて行く私』などがある。

また、こうした文筆活動のほかに、婦人雑誌『スタイル』創刊や着物ブランド設立など実業家としても活躍した。戦後は桜模様の着物や生活雑貨を企画・製造・販売するなど事業を展開し、華やかで行動的、かつ創造力豊かな人物として、平成8年(1996)、98歳でその生涯を閉じた。

調整中

図 2-7-12

調整中

図 2-7-13

調整中

図 2-7-14